

あつた あつた!

2019
-2020

Osaka Prefectural Art Museum

上野田寺美術館

OPEN

II 学校と、いっしょ

03	みんなが大人になったとき	榎本 寿紀
	[スクール・プログラム]	
05	コレクションから活動を振り返る《びじゅつかんの旅・旅じたく 小4ミュージアムツアー》	
06	・コレクション展I 没後10年 岩澤重夫に捧ぐ ―自然との対話	宗像 晋作
07	・コレクション展II エコール・ド・パリと竹	木藤 野絵
09	・コレクション展III OPAMアニマル★パラダイス	木藤 野絵
13	・コレクション展IV 福田平八郎 対 宇治山哲平 ―和洋の眼	梶原 麻奈未
17	・コレクション展V 旅する美術	池田 隆代
21	・コレクション展VI 美の女神たち	宗像 晋作
23	・とっておきの旅・旅じたく	
24	・ガイドスタッフ・引率教員研修	
25	アウトリーチ 空を眺めて	榎本 寿紀
27	来られないなら、こちらから行く《アウトリーチ・プログラム》	
28	・地域まるごと美術館[竹田展] 絵のなかの旅 ―ふるさと・名所・世界へ	宗像 晋作
31	・スクールミュージアム 姫島の色 ―海がつなく歴史と文化	菅野 剛宏
33	・地域づくり講座 [国東市立安岐中学校]	
34	・アウトリーチ・プログラム	
41	出前ワークショップで出会った子どもたち	藤木 美里
43	いっしょに、やりましょう《先生のための講座》	
49	大分県の図工・美術教育について/美術館のガイドスタッフ	佐藤 収
53	実施一覧	
59	大分県内アウトリーチ・フィールドワーク実施地図	

I 楽しい美術館

03	5年間の歩み 「すごい」って言葉、すこくない?	榎本 寿紀
	[みる、つくる、かんじる 美術体験プログラム]	
05	朝のおとなの1010講座・夜のおとなの金曜講座	
06	・4つの教材ボックス	
07	・視るは楽しい教材ボックス	
09	・大分県から絵の具をつくる	
11	・美術からみた文化	
13	・素材と技術	
16	・Hands on Works	
17	・番外編	
18	公開ラボラトリー 教材ボックス、つくってます!	
19	どなたでもワークショップ アトリエ・ミュージアム みんなでつくる!	
25	みんなの土曜アトリエ	
35	特別ワークショップ&レクチャー	
36	・夏の特別ワークショップ 第一弾	
37	・夏の特別ワークショップ 第二弾 手が語る	
44	・美術館をめぐる7つのお話	
45	・企画展「The Ukiyo-e 歌川派」関連ワークショップ&レクチャー	宗像 晋作
49	・冬の特別ワークショップ 企画展「岡本太郎展」関連ワークショップ	木藤 野絵
51	これからの美術館	榎本 寿紀
55	OPAMって、どんなところ?	野上 智美
57	OPAMサポーター教育普及グループ活動	
58	情報コーナー	
59	教育普及グループ活動記録展示	
60	今年度のトピックス	

がっこうと、いっしょ

みんなが大人になったとき

大分県立美術館の学校連携プログラム

大分県立美術館は開館以来、子どもたちに本物を体験してほしい、そして美術館が楽しいからおいとよ発信したい、との思いから、学校との連携事業に力を入れている。開館初年度、「小学生ファーストミュージアム体験事業」を実施した。これは大分県知事部局と大分県教育委員会、そして美術館の管理・運営を行う大分県芸術文化スポーツ振興財団で構成された「美術館と学校等の連携推進協議会」により、県内の全小学生6万人を美術館へ招待する事業だった。続く2016年度から、大分県教育委員会による「アクティブラーニング美術教育推進事業」が3年間続き、今年度からは「ミュージアムを活用した美術教育実践事業」が始まった。これは、事業名は変更されているが、ともに通称「小4ミュージアムツアー」として、県内の希望する学校から、小学4年生をコレクション展に招くというものだ。

しかし時間割の設定をはじめ、様々な事情で学校や地域から美術館に行くことが難しい場合も少なくない。そこで開館2年目より様々なアウトリーチ活動を行っている。その中で特に大きな活動は、コレクションの巡回展とでもいうべき移動美術館だ。今年度は「地域美術館体験講座」として、竹田市で地域まるごと美術館「絵のなかの旅—ふるさと・名所・世界へ—」と題し、竹田出身である田能村竹田の作品や竹田市内(岡城址跡など)が描かれた作品を展示(竹田市総合文化ホール グランツたけた)。そして姫島村ではスクールミュージアム「姫島の色—海がつかなく歴史と文化—」と題し、海や魚をモチーフとした作品を展示し(姫島離島センターやはず)、多くの子どもたちや地域の人々に作品を見てもらった。

また希望があれば学校や幼稚園、こども園などでワークショップを行っている。これは、今すぐではなくとも、将来、美術館に来てほしいとの思いから行っている活動である。そして、美術館へ来て作品を見てもらうために行っているのが、「びじゅつかんの旅・旅したく」だ。これは学校から美術館へやって来る「びじゅつかんの旅」と、美術館スタッフが事前に学校を訪れ、身体と感覚を活性化させる美術体験ワークショップを行う「びじゅつかんの旅したく」という、美術館体験とアウトリーチを組み合わせた活動だ。

より多くの子どもたちに、美術館の作品と出会ってほしい。

情熱のある熱中先生

こうした学校との連携事業で重要となるのは、現場の先生の力だ。例えば、担任の先生が子どもたちを美術館に連れて行きたいと思う。学年全体で行くのなら、他のクラスの先生、学年主任、そして教頭先生や校長先生、場合によってはPTAの了解も必要かもしれない。時間割の調整や往復の交通手段、安全の確保も必要だ。子供たちを作品と出会わせたい、という思いが強くなければ、実現への道は遠いだろう。それはアウトリーチでこちらから学校に行く場合の時間割調整も同じだ。アウトリーチで訪れる学校や、「びじゅつかんの旅・旅したく」で来ている学校の先生方の努力と情熱なしにはできないのである。

美術の授業はとんとん少なくなってきている。複数の学校を掛け持ちして授業を行っている先生もいる。受験に美術は必要なのだろうか。人生に美術は必要なのだろうか。こうした疑問を持つ先生もいるだろう。しかし、美術には生きていくための力があると信じる美術館としては、美術の力を広げたい。先生自身が、美術館の活動を知り、作品を見る楽しさを感じてほしい。だからこそ「先生のための講座」は、絶好の機会である。学校の先生のための講座では、先生自らが感じることを、楽しむことを念頭に置いている。「何を勉強したらいいかわからない」「生徒に何を教えたらいいかわからない」「コンクールに入選するための絵はどう描いたらいい?」といった悩みを抱えている先生も少なくない。中にはすぐに使える技術的な知識を求めてくる先生もいる。しかしそもそも美術には答えがない。教える・教えられるという関係ではなく、子どもたちと一緒に感じる、あるいは一緒に作り上げていくことが可能だ。そのためには、まずは先生自らが、色を楽しむ、形で遊ぶなど、美術作品を能動的に見て、心を遊ばせてほしい。小4ミュージアムツアーで訪れる先生たちには、作品を見ることを一緒に楽しんでほしい。だから事前研修でも、純粋に視ることを楽しんでもらう。先生自身に、このことを感じてもらえれば、作品を見る楽しさは、当日、子どもたちにも伝わるだろう。

一緒に視るギャラリーツアー

本来、作品を視るのはきわめて個人的行為である。展覧会を楽しむには、自分の視点を持つことが、何より大切だ。そのためにはどうするか。丁寧に作品を視る、ただそれだけでいい。そして「見る」が「視る」に、つまり能動的な視点になれば、自分の視点が生まれ、美術も美術館も、とたんに楽しいものになる。美術の幅広さや楽しさを体験するためには、作品に対する事前学習や作品鑑賞への意識を高める必要はない。

身体をダイナミックに使う美術体験をすることで、美術館に行くのが待ち遠しくなるようにとの思いから、「びじゅつかんの旅したく」が始まった。学校が団体で訪れるのなら、みんなで一緒に視て楽しむのがいい。作品は、個人で視るだけでなく、複数で視ると見方は広がるからだ。そんな思いから、「小4ミュージアムツアー」でも、「びじゅつかんの旅」でも、そして移動美術館でも、通常の団体見学受け入れとは異なり、作品の解説ではなく、美術館スタッフと“一緒に視る”ワークショップ形式のギャラリーツアーが生まれた。

作品を視るときには、子どもと一緒に視て、一緒に楽しむことが大切だ。「○○に見える」「△△がいた!」「えっ、写真じゃないの?」などなど、作品と出会ったときの感動は、自然と言葉に出してしまう場合もあれば、ただじっと見つめ、言葉にならない場合もある。自分の視点を大切にすると、作品に関して必ずしも良かった、感動したという感想だけではない。しかし限られた時間のギャラリーツアーで感想を書かせると、友達と同じ意見が並びがちだ。ところが後日、学校から送られてきた感想文には思い思いの言葉に、気になった作品の絵が添えられていたりして、楽しい。

作品を視ること、それは学びではなく、遊びに通じるものがある。「美術館をめぐる7つのお話」の中で登壇した長崎県美術館館長・米田耕司氏の「楽しいことは身につく。そうでなければ、美術を友としていけるのか」「ミュージアムを学校として例えるのなら、昔の美術館は教習型。今の美術館は劇場型で、お祭りともいえるのではないか。面白くなければ見ないし、これが本当の教育だ」という言葉には勇気づけられた。

学校と、いっしょ

多くの美術館が、子どもたちに美術館へ来てほしいと願っている。世田谷美術館(東京都)では、1986年の開館以来、「美術鑑賞教室」を行い、地域すべての区立小学校4年生(62校、年間約5,000人)と区立中学校1年生(29校、年間約3,000人)を招いている。金沢21世紀美術館(石川県)では、2004年の開館時、「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」で金沢市内の小中学生約4万人が訪れ、2006年度からは「ミュージアム・クルーズ」として市内の小学4年生を招聘している(2017年度は60校、4,349人)。近い所では、2017年11月にリニューアルオープンした北九州市立美術館(福岡県)が、市内の全小学3年生を対象に「ミュージアム・ツアー」を始め、2018年度には129校、8,167人が来館している(いずれも美術館のHPより、人数は引率者を含む)。そして大分県立美術館では、大分県教育委員会が希望校を募って「小4ミュージアムツアー」を実施し、小学校から幼稚園、こども園までを対象に、美術館が希望を募って、年間を通じて「びじゅつかんの旅・旅したく」を実施している。

このように学校が団体で美術館に来る時の要となるのは、もちろん展覧会。学校の先生が熱意を持って子どもたちを美術館に連れてくるのと同じように、我々美術館で働く人間もまた、みんなに美術館へ来てほしいと真剣に願って展覧会に力を入れている。今年度の「びじゅつって、すげえ!」では、「コレクションから活動を振り返る」として、各展覧会を担当した学芸員の企画への思いと見どころを満載にした。そして、その展覧会を「びじゅつかんの旅・旅したく」「小4ミュージアムツアー」で訪れた子どもたちがどのように見ているのかという視点から、活動を振り返ってみた。館外活動のアウトリーチ・プログラムとしては、美術館の収蔵作品を地域の文化施設や学校などに展示する「地域まるごと美術館」と「スクールミュージアム」、アウトリーチ・ワークショップ、さらに学校の先生のための講座から、学校との連携活動の詳細を記した。学校との連携により、美術と美術館好きが増えるよう、美術館スタッフ全員で活動を続けていきたい。

榎本 寿紀 Toshihi Enomoto

大分県立美術館 学芸企画課 教育普及 主幹学芸員



コレクションから
活動を振り返る

びじゅつかんの旅・旅じたく 小4ミュージアムツアー



大分県立美術館は開館以来、「子どもたちに本物を！」との思いから、学校との連携事業に力を入れている。学校が美術館を訪れる美術館体験は、作品解説ではなく、美術館スタッフと“一緒に視る”ことで美術館をめぐる「びじゅつかんの旅」と、事前に学校を訪れて身体と感覚を活性化させる「びじゅつかんの旅じたく」を組み合わせている。また教育委員会と一緒に「ミュージアムを活用した美術教育実践事業」で県内の小学4年生を招き入れる、通称「小4ミュージアムツアー」を行っている。視るのはともに県立美術館のコレクション展。この展覧会は美術館のコレクション約5,000点から年5~6回、テーマを決めて開催している。作品をただ並べるだけでなく、展覧会として組み立てるには物語が必要だ。担当学芸員は、こういう風に見てもらったら面白いと、あれこれ物語を考える。ここが腕の見せ所だ。その物語から、子どもたちは何を感じ、何を面白がったか。子どもたちが楽しんでいる姿を見てほしい。

コレクション展 I 没後10年 岩澤重夫に捧ぐ一自然との対話

2019年4月5日(金)~6月4日(火)
前期 4月5日(金)~5月7日(火)
後期 5月9日(木)~6月4日(火)

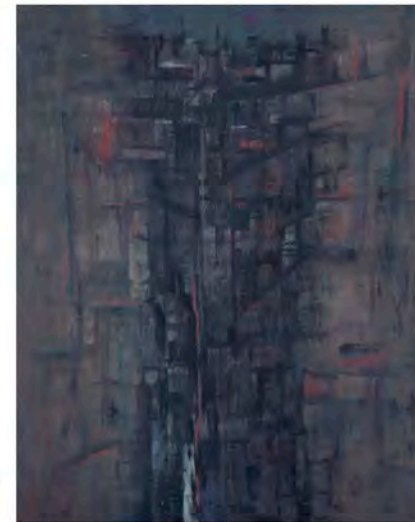
日田市に生まれた日本画家・岩澤重夫(1927-2009)の没後10年を記念して、そのダイナミックな風景画を特集した。岩澤は、京都市立美術専門学校を卒業後、京都画壇の巨匠・堂本印象に師事し、日展を主な作品発表の場として活躍している。画業の初期より、一貫して風景画の新たな可能性を探る創作活動を続けた。大自然の雄大な景観や、四季折々の光景をみずみずしい感覚でとらえた作品は、今日もなお多くの人々を魅了している。

また大分県では、19世紀(江戸末期)より、田能村竹田、高橋草坪、平野五岳をはじめとした南画家たちが、様々に山水世界を表現してきた。近代以後も高倉観崖、麻生珠溪、福田平八郎、高山辰雄といった日本画家たちが、それぞれの視点でとらえた自然を描き出している。生前の岩澤は、こうした大分の日本画家の先達がいることが、“生きる心の柱”になっていると述べている。岩澤の作品とともに、大分を代表する日本画の作家たちの山水画、風景画をコレクションの中から精選して紹介した。

美しい山川に恵まれた日田市で育った岩澤は、豊かな四季の風情をみ

せる大分県の自然景観にインスピレーションを受けた作品を、数多く制作している。本展では、そうした岩澤の代表作《天響水心》(1990年)を展示冒頭で紹介。英彦山から耶馬溪を流れ下る山国川の勢い、水の生命が横16面のパノラミックな画面に表現された渾身の作だ。まさに岩澤の真骨頂といえる作品が、最初に目に飛び込んでくるというインパクトある展示構成をとった。

また岩澤は、画業初期の1950~60年代にかけて、《嶂壁》(1958年)に代表されるような、実験的、幾何学的な日本画の抽象画を発表している。岩澤は、こうした抽象画の模索の跡が、その後日展で次々と発表される大画面の山水、重厚な風景画の視点の設定や、量感の表現につながったと述べている。展示後半では、1960年代までの抽象画と1970年代以降の風景画、二つの作風を対比させて展示した。ギャラリートーク参加者などの感想では、岩澤が手掛けた抽象画を初めて知り、伝統に囚われないユニークな表現に興味を持ったという声が多くあった。



岩澤重夫《嶂壁》1958年



岩澤重夫《晨》1973年



担当学芸員
宗像 晋作 Shinsaku Munakata
大分県立美術館 学芸企画課 主任学芸員
大分市生まれ。犬飼町育ち。6年前にUターン。近世から近現代の日本画を研究分野としています。趣味はどれも下手の横好きですが、ランニング、登山、写真、料理など。大分の海浜や山岳の雄大な光景が好きです。

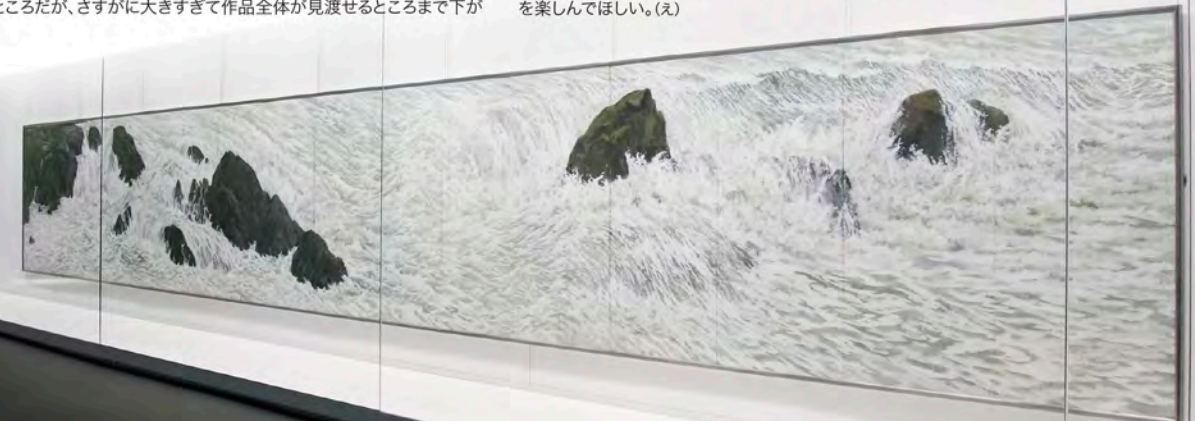
【コレクションの見方・楽しみ方】

岩澤重夫《天響水心》1990年

作品を視るときに、近寄る・離れるは、ぜひ試してほしい楽しみ方だ。特に美術館コレクションの中で最も大きな作品の一つ、岩澤重夫《天響水心》でこの方法は外せない。

はじめに絵を視るために、ベストスポット(作品の縦横を見比べ、長い方と同じ距離だけ下がったところ)から視る。ここは首や眼を動かさずに、視界の中に作品がすっぽり収まって見えるスポットだ。そこから近づくと描き方が、離れると絵の印象が感じられる。この絵でも試したいところだが、さすがに大きすぎて作品全体が見渡せるところまで下が

れない。可能な限り離れ、手を筒状にしてのぞいてみる。簡単な望遠鏡だ。この望遠鏡にレンズは入っていないが、なんと画面が明るく見える。通常は作品を掛けている壁と一緒に視界に入る。すると作品と白っぽい壁の色が影響しあい、作品が全体的に暗く見える。だが、手を筒状にすると、壁が視界に入らないので作品の色が明るくなる。これはすべての来館者に試してほしい見方だ。左から右へ、右から左へ、ゆっくり動き、水の流れを見る。次は近寄り、ゆっくり歩いてみる。左から右へ歩くときは、流れに身を任せ、右から左に歩くときは、一生懸命水をかき分ける。近寄ってしゃがんでみると、岩絵の具の粒子がキラキラと光って見える。勢いよく流れ、飛沫が散る。穏やかな流れやよどみ、渦もある。水の表情を丁寧に描き分けている大作は、近寄って、離れて、水の表情を楽しんでほしい。(え)



コレクション展Ⅱ エコール・ド・パリと竹

2019年6月7日(金)～8月6日(火)
前期 6月7日(金)～7月2日(火)
後期 7月4日(木)～8月6日(火)

企画展「竹工芸名品展：ニューヨークのアビー・コレクション メトロポリタン美術館所蔵」の開催に合わせ、大分県立美術館が所蔵する竹工芸作品の中から傑作・優品をご紹介します。別府竹工芸の黎明期に深く関わった佐藤竹邑齋、竹芸を芸術の域に発展させた生野祥雲齋ら、大分の竹工芸の清楚な佇まい、緻密な技、ダイナミックな編組など、ヴァリエーションに豊かな竹の美を展覧した。

大分の竹に対するは、時空も技法も異なる、エコール・ド・パリの世界。1920年代のパリではヨーロッパ各地から芸術家たちが集い、互いに刺激し合いながら制作を行った。ピカソ、藤田嗣治、ローランサン、キスリングら、エコール・ド・パリの中心的人物たちの作品の他、荻須高徳、東郷青児、山口長男ら、パリでの活動を礎に制作を発展させた日本人画家の作品を展示した。

大分の竹とエコパリ。特定の場に芸術運動が開いたという強い地域性ととも、作家や作家の卵たちが内外から集って運動を活性化させたというグローバルな性質を合わせ持つ。竹工芸とエコール・ド・パリは、まさに出会い

の場としての芸術。この二つの芸術運動を組み合わせることは、意外性に富んだ展開であったが、「出会いのミュージアム」である大分県立美術館らしいコレクション展となった。

コレクション展ではおなじみの竹工芸作品も、キュビズムやフォービズムに影響を受けたエコール・ド・パリの絵画とともに並べることで、荒編みや自然の竹の歪みを利用した野趣に富む手法や、近代彫刻とも比肩する抽象的な造形など、先鋭的な側面がより際立つ。東西の美術のクロスポイントを見出すことができたのではないだろうか。



担当学芸員
木藤 野絵 Noe Hito
大分県立美術館 学芸企画課 学芸員
埼玉県から来て早6年。真の大分人になるまではまだまだかかりそう?!
近現代美術、デザインなどの企画展を担当しています。どうぞよろしく。



生野祥雲齋《ホールのための置物 泉将》1962年
●ふくらみにみえた。
●ねじれていたり、こまかくあんでいたりして、すごかった。

モイーズ・キスリング《ミモザ》1945年
●花の絵がぶつぶつしていた。飛びでているみたい。
●花びらがほそながくなって、てんてんなどですごい。
●花の絵がきらきらかがやいていて、とてもビックリしました。



生野祥雲齋《十字華紋高環盛籠》(寄託)1952年
●かげを見たらしいたいけみたい。



此君亭工房《笹舟》(寄託)昭和40年代
●ささぶねがはやくながしてという思いを伝えているように見えた。
●川に流したら「スーッ」ときれいに糸のように流れそうだった。



宮崎珠太郎《拡がりⅡ》(寄託)1968年
●せんぶうきにみえた。
●ふだんみるものをまねしてつくっていた。

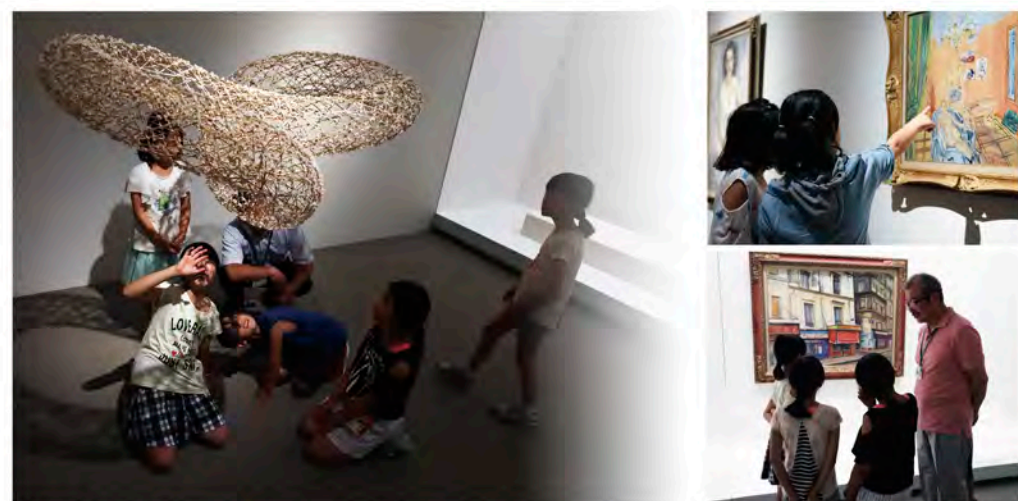
- どの絵もなにかを伝える。
- さわらなくても、見た目、でこぼこなどたくさんみつけた。
- つぶつぶや、さらさらなどの絵を見ました。

- かげなど細かくかいて、かかてきたと思った。
- ぼくはなんのためにこんなのを作ったのか気になります。
- ピカソの絵がへんでびっくりした。

小4ミュージアムツアー

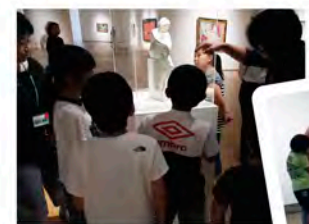
コレクションから活動を振り返る

コレクション展示室いっばいに展示された、当時のパリを彩った様々な作品を見て、子どもたちはその当時のパリの雰囲気を感じていた。「近づいてみたら、絵の具の点々がとてもきれい」「離れて見たらなんだか人の顔に見えたよ」など、ガイドスタッフのアドバイスを受けて見方を変えることで、いろいろな発見をしていた。当時のパリの人たちが憧れた日本の竹工芸作品のコーナーでは、作品をいろいろな角度から見て、繊細に編み込まれた竹の造形的美しさや、作品が描き出す影、モアレの変化も楽しんでいた。(さ)



川島茂雄《産雲》2012年

- 下からみたら、ひもがおはなみだいたった。
- へびみだいたった。
- むすばっている所がきれいで、かげもすぐできてきた。
- 見る時によって形がかわるのがきれいです。



- 参加校
竹田市立竹田小学校
玖珠町立小田小学校
佐伯市立宇目緑豊小学校
別府市立鶴見小学校

【コレクションの見方・楽しみ方】

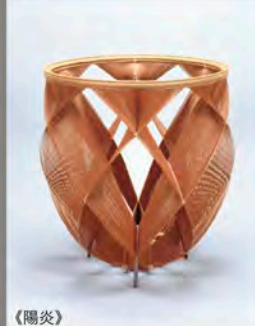
生野祥雲齋《炎》1957年《陽炎》1958年

竹工芸の作品は、竹ヒゴが緻密に組まれているため、多くの作品でモアレ模様を楽しむことができる。そのためには、少し作品から離れた方がよい。歩きながら、あるいは上下左右に身体を動かすと、モアレ模様がユラユラと見える。少し動くだけで変化する模様をひとつ見ると、思わず右へ左へと体重移動してしまう人は少なくない。その秘密は竹ヒゴの太さにある。太さを少しずつ変えることにより、生まれる模様に変化をつけている。作品によってモアレ模様の生まれる部位が異なるのは、竹ヒゴの太さや間隔、リズムによる。生野祥雲齋《炎》は、まさに火が燃えているようなモアレ模様が見える。一方、ユラユラと空気が動いて見える《陽炎》。モアレ模様を見比べると、タイトルに思わずなるほどと、うなずいてしまう。

こんな楽しみ方も!
展示室にはぜひ双眼鏡を持って行ってほしい。展示ケースに収められていても、双眼鏡を使うと、細部の魅力に息をのむ。竹工芸の丁寧に編み込んでつくられた構造、あるいは藤が巻き付けられてきた模様は、まさに「神はディテールに宿る」といった印象を受ける。さらに作品によっては、双眼鏡で切り取られた画面が別世界へ誘ってくれる。できれば動きやすい服装と靴で来館し、しゃがんで作品の底の意匠を見たり、いろいろな角度から見ながら使い方を想像することをおススメする。きっと新たな魅力を発見することだろう。(え)



《炎》



《陽炎》



コレクション展Ⅲ OPAM アニマル★パラダイス

2019年8月9日(金)～9月23日(月)
 前期 8月9日(金)～9月3日(火)
 後期 9月5日(木)～9月23日(月)

コレクションから活動を振り返る

コレクション展示室が「動物たち」でにぎわう「アニマル★パラダイス」を開催！所蔵品の中には、動物が登場する絵画や彫刻が多い。身近な鳥、犬、猫。古くから人々の暮らしに寄り添ってきた牛や馬。日本では珍しい孔雀や虎。さらには空想上の生き物まで。故事などの言い伝えに基づいた作品や、動物のありのままの姿を生き生きと捉えた作品など、動物の姿を豊かに取り入れた作品を通して、作家それぞれの作風や、美術の変遷をたどる展示を目指した。

展示室を「空の生きもの」「森の生きもの」「水の生きもの」「暮らしの生きもの」の4つのコーナーに分けて、4人の学芸員がそれぞれの展示プランを立てた。「空のいきもの」では、所蔵品の動物の作品の中でも一番多い「鳥」に注目。鶴や孔雀、鷹などは、それぞれに吉兆などの象徴的意味があり、その気高い姿は掛け軸や屏風に描かれた。「森の生きもの」では、うさぎ、虎、熊など多種多様な動物を紹介。中でも「森の賢者」とされるフクロウは、絵画・彫刻・工芸と、多岐にわたる素材や技法で表現されている。「水の生きもの」では福田平八郎に注目し、釣りを愛好した福田が描いた川魚や水鳥の素描を展示。「暮らしの生きもの」では、犬、猫、牛など、人の暮らしに寄り添ってきた動物たちの愛らしい姿を取り上げた。さらには、「人」をモチーフにした作品を展示し、芸術を生み出し鑑賞する私たち自身の姿を振り返るというエピソードを設けた。コレクション展を「動物」という身近なキーワードで構成した本展は、夏休みの子どもたちに好評であっただけでなく、あまり展示する機会がなかった所蔵品を広く紹介する機会となった。

担当学芸員 木藤 野絵



渡邊長男《犬》大正～昭和初期
 ●犬の目がハートだったのがかわかった。



山本常一《フクロウ(仮題)》1950年代
 ●前から見るとふくろうで、うしろから見るとあざらしだったから、すごいと思った。
 ●手にのせているかんに写真をとったり、同じポーズをとったりして楽しかった。



福田平八郎《安石権》1920年



高山辰雄《二匹の仔犬》1955年
 ●2ひきの子犬がけんかして、1ひきはしらんぷりをしていて、もう1ひきはふてくされてました。犬のおおかなしそうでした。
 ●かわかったので一目ぼれした。
 ●けんかした後みたいで、ふりむきもしないところがマンチャでかわかった。



岩澤重夫《豊山豊水 春 津江溪春色》1991年
 ●アニマルパラダイスだから動物をさがしてみたけど、1匹も見つけれませんでした。この絵に動物はいるんですかね？ いるのなら、とつてもかくれんぼが上手だと思えます



福田平八郎《双鶴》1935年
 ●はねが、いちまいいちまい、きれいだった。
 すべかったです



糸園和三郎《馬》1985年

●馬の顔がとてリアルですごかった。
 ●体がみえなかったけどすごかった。



福田平八郎《鰻》1926年

●リアルだからすぎです。ウナギがめぐるめるしそう。



●同じ班の人と動物のまねをやるのがおもしろかったの、次の展覧会にも行きたい。
 ●絵にはいるんことがかかされてるんだなと思いました。
 ●作品をゆっくりと見てみると、それを描いた人の気持ちが伝わってきて楽しかった。

●ネコの目と私の目を合わせて、どんな気持ちなのかなと考えてみると、少しいやがっているふうにも見えたし、かいまと遊んでいる、少し楽しそうな気持ちにも見えました。

びじゅつかんの旅・旅したく 小4ミュージアムツアー

コレクションから活動を振り返る



びじゅつかんの旅

「一緒に視る」

じっくり作品を視るのはもちろんだが、今回の彼らには+αのミッションがある。それは作品と一緒に写真を撮ること。登場する動物と同じポーズを真似てみたり、作品の世界に加わってみたり、遠近法を利用して手・指・肩に動物を乗せたように写真を撮る。楽しく展示室をめぐる。今日来た彼らと最初に会ったのは、美術館が開館した時、彼らが小学3～5年生の時だった。後ほど、美術の先生がみんなの感想文を届けてくれる。とても楽しかったようだ。今度は友達と、家族と一緒に、あるいは一人で来てほしい。(え)



- 動物を手前にしているかんに写真を撮ったり、同じポーズをとったりして楽しかった。
- 小学3年生で行った時とは違って、中学生になって絵の細かいところや表現の仕方などを考えながら見てみると、とても感動しました。
- どの作品も動き出しそうですごく良かったです。
- OPAMに行くことを「旅」、行く前の授業を「旅したく」。この名前がOPAMに行くことをもっとわくわくさせてくれました。

竹田市立都野中学校 全学年 (竹田市)

びじゅつかんの旅したく

「ころころピンポン+ふわもこ」

3,000個以上の色とりどりのピンポン玉をぶちまける「ころころピンポン」。思わず「きれーい!」と歓声が上がります。そして布を空中高く舞い上げる「ふわもこ」。体感型ワークショップを続けて行うのは珍しい。彼らの体力は底なしだ。身体と感覚はたっぷり刺激された。(え)

- 全部のピンポン玉がはねているのはとてもきれいで、いつもの体育館とは全然違う景色でした。
- 楽しい時間が早くてびっくり。いかに男子と話せたので良かったです。
- ピンポン玉をばらまいた時、小学校低学年のときのような久しぶりの楽しい感かを味わえて、とても良かったです。



社会福祉法人 慈光会 にしきこども園

年中組・年長組 (中津市)

びじゅつかんの旅したく

「ふわもこギヤラクシー」

みんなで布を揺らすと、ふわふわもこもこ、形が変わる。そこへ宇宙の映像を投影すると、歓声が上がった。(え)

びじゅつかんの旅

「ばたふわ+一緒に視る」

園から美術館までバスで約1時間半。美術館での滞在時間も合わせると、一日がかりだ。うちわで大きな紙を浮かせるワークショップ「ばたふわ」を行ってから、美術館の中を歩き回った。コレクション展では、好きな動物たちを探しまくる。美術館を1階から3階まで歩きつくした一日。幼い子どもたちにとって、まさに「びじゅつかんの旅」だった。(え)



小4ミュージアムツアー

展示室には日本画、洋画、大きな屏風、彫刻など、様々なかたちで表現された動物が! 子どもたちは、絵の中に動物・生き物を見つけては、思いの感想をガイドスタッフと話したり、描かれた動物の姿を真似てポーズをとってみたりした。中には、じっくり見ないと動物が見つけられない絵もあって、「岩が動物に見える」「森に隠れていて見えないけど、鳴き声が聞こえてくる」など、面白い見方を発見した子どもも。龍や麒麟といった空想の生き物の作品もあり、楽しい鑑賞ができた。(さ)



【コレクションの見方・楽しみ方】

山本常一《夜の証》1974年

動物をモチーフにした作品を視るときは、まず視線を合わせてほしい。角度に気をつけて、しゃがんだり、背伸びをしたりしてしっかり視線を合わせる。すると、ぐっと親近感が増す。正面から目を合わせたら、次は思い切ってしゃがみ込んで見上げる。迫力ある、堂々とした動物たち。そんな視線で作品を見てほしい。作品によっては、どこから見ても目が合う、そしてこちらが動くことと追いかけてくる視線に、驚いたことはないだろうか。例えばレオナルド・ダ・ヴィンチのモナ・リザがそうだ。東洋では「八方睨みの龍」が、どこから見ても目が合う不思議な平面絵画の代表例だ。しかし彫刻や立体作品は、目が合い続けることは少ないだろう。そこで彫刻の場合は片眼をつぶり、手を差し出す。すると手の上にはちよんとその動物が乗っかかりはしまいか? 反対の手で撫でてあげるのもいい。肩に、頭に、乗せるフクロウは、愛らしいことこの上ない。(え)



●参加校
津久見市立青江小学校
佐伯市立八幡小学校

コレクション展Ⅳ 福田平八郎 対 宇治山哲平 — 和洋の眼

2019年10月25日(金)～12月3日(火)

コレクションから活動を振り返る

本展は、当館開館以来、初の二人展である。取り上げた作家は、日本画家・福田平八郎(1892-1974)と洋画家・宇治山哲平(1910-1986)。徹底した写実表現から出発し、晩年に明るい色面構成の世界に達した福田。漆芸の分野から出発し、油彩画に転向、鮮やかな色彩と幾何学的な画面構成による独自の抽象世界を切り拓いた宇治山。分野の異なる二人の作品の移り変わりを対比しながら紹介しつつ、抽象芸術をわかりやすく伝えることを目指した。

展示構成は6章だて、第1室・第1章は福田、次は宇治山、その次は福田という具合に交替で一定スペースを割り当てた。当初は、同主題の二人の作品を同室に並べることも考えたが、展示の意図が観る側に伝わりにくいと考え、改めた。

基本的な並べ方は時系列順だが、それだけでは単調になると判断。ところどころにあえて年代の異なる作品を入れた。例えば、第1章の「福田リアリズム」。1910～1920年代が中心だが、色彩を抑えたものが多いため、1950年代の、写実を重視しつつも明るい色彩を用いた作品を出すことで、メリハリをつけるように工夫した。

第2章では宇治山の版画作品、風景画、静物画を並べたところ、鑑賞者から好評だったのは版画作品だった。宇治山というと後期の《童》(1972)のよう

な、幾何学的な画面構成というイメージがあるので、風景や人などを描いた版画作品は新鮮とのことだ。

第3章は福田の素描がメインで、第4章は宇治山の砂丘や岩を描いた油彩画と中東旅行時の素描を紹介。ピラミッドなどよく知られているものを優先的に出すことで、中東のどこを描いたのか、鑑賞者が想像しやすいようにした。

大づめは第5-6章。章解説の内容に最も苦心した。実は、解説文はこの第6章から作った。最初は1章から書いたが日本画担当者と足並みがそろわない。そこで、最後の6章を先に作り、ゴールを共有。結果、福田と宇治山の共通点と相違点をコンパクトに伝えることができたと思う。ギャラリートークの参加者などからも好評の声があった。



担当学芸員
梶原 麻奈未 Manami Hagiwara

大分県立美術館 学芸企画課 学芸員
洋画、工芸の副担当。新潟出身。夏場、大量に汗をかいたので毎日着替えを持参する。まだばれていない。



宇治山哲平《宙》1969年
● 絵なのに宇宙がそうぞうできる。
● みんなで宙という絵を見て、海とか空とかいろんな題がでて楽しかった。



宇治山哲平《童》1972年
● がらがめちゃくちゃすこかった。
● ○△□でいろいろな形やおやふしぎな形が見えてきた。
● むかしのあそびどうぐがいっぱいあった。プーメンやめんこ、おて玉に見えた。
● にぎやかだし、色がいっぱい形もいっぱいだからきれい。



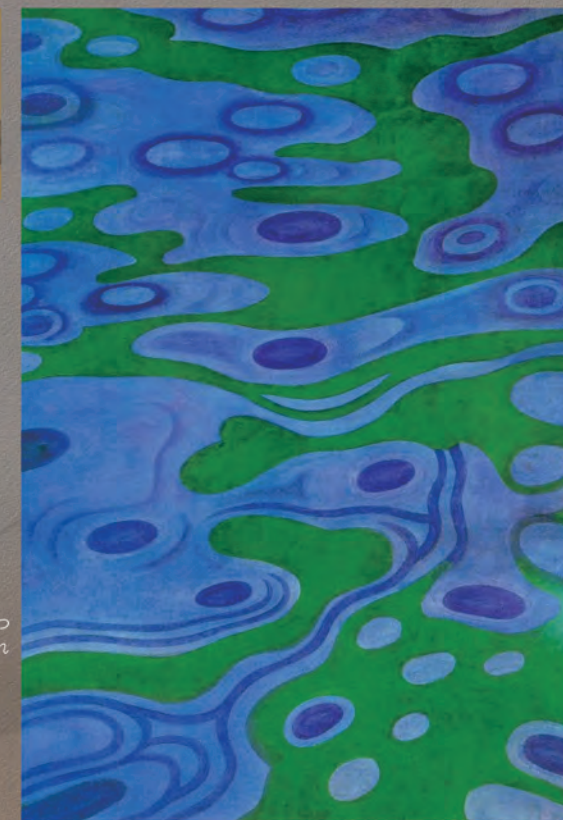
福田平八郎《竹》1940年頃
● わたしだったら本物の竹の色にちかづけるけど、いろんな色を作っていてすごいなと思った。
● 竹の色あいや、りったいかんが心にくりました。もってかえるとしたら竹の作品がいちばんほしいです。
● 下のところといっしょに上のぶぶんがあればいいと思いました。



福田平八郎《羊》1918年
● 男のひつじがけんかしていました。女のひつじは草をたべたりしていました。わたしは「ひつじのむら」と名前をつけました。
● ヒツジの戦っている絵が、はくりよくがあり、実に見えているようだった。



福田平八郎《水》1958年
● 音がきこえてきそうと思った。
● 緑色のところがキラキラしていてキレイ。
● 色がいろいろある。空の色が氷にうつてる。
● なんだかすこすこかかった。
● 美術館に行く前にもらったしおりの見た時はふうの絵に見えました。でも行って見たらわずれられない作品になりました。



福田平八郎《新雪》1948年
● 雪がとてもきれいで安しんする絵だから好き。



● いつもえを見るだけだけど、今日は感じながら見たからたのしかった。
● 一番に残ったのは、宇治山哲平のかき方です。わたしが思っていたより、ざらざらしていたり、つるつるしていたりしたから。

● 絵は、人によって見えかたがちがいます。だからいろいろ考え方があふれるように出てきます。だからとてもおもしろいです。
● 終わる時間になると、もうちょっとしょうかいてほしいな、まだいたいなと思いました。

● 帰りのバスの中で心に残ったことやたのしかった、おもしろかったことなど、みんなとたくさん話しました。
● いろいろな作品から「人」が見えた。
● OPAMの作品を見ていると、ほくも絵がかきたくなりました。

● こいが集まっている絵は、見てたらみんなが集まって心が一つになっていそう。
● 本当におよいでいるみたいで、すごかった。わたしもこんな感じがかいてみたかった。



コレクションから活動を振り返る

びじゅつかんの旅・旅したく 小4ミュージアムツアー

学校法人 得丸学園 宮河内幼稚園 年長組 (大分市)

びじゅつかんの旅したく

「ふわもこギャラクシー」

布を膨らませる体感型ワークショップ「ふわもこ」。ドーム状に膨らんだ布に宇宙の映像を投影して、中に潜りこんで見るのが「ふわもこギャラクシー」。暗くて見る場所限定のワークショップだ。布の中からゴロゴロして見るのもいいが、外から布に投影された様子を見るのも面白い。(え)



びじゅつかんの旅

「一緒に見る」

美術館で福田平八郎の絵を視ると、おいしそうなお菓子があつた。花が咲いているものもあれば、散っているものもある。おしゃべりしている雀の親子。外を向いているトカゲもいた。1枚の絵も時間をかけて見ると、様々な発見があつた。一方、宇治山哲平の抽象画は、初めは何かかわからなくても、じっくり視てみると、線や面、そして色の組み合わせが気になり始める。見立て遊びをしながら、作家の描こうとしていたことを想像した。入口のモニュメントやアトリウムの作品など、美術館を隅から隅まで楽しんだ。(え)

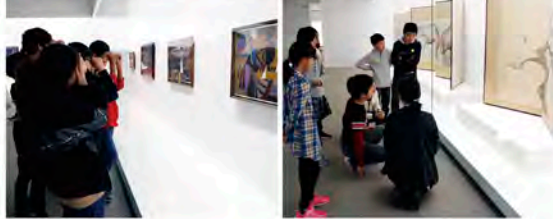


臼杵市立臼杵南小学校 6年生 (臼杵市)

びじゅつかんの旅したく

「ぼわんぼわん」

透明な90ℓのビニール袋を振り回すだけで、両手で抱えるほどの大きさの風船ができる。黒く長いビニール袋は、持って走ると生き物のように動く。もっと大きなビニール袋も、布団乾燥機の熱風を入れると軽々と宙に浮く。最後はスティック状のカラフルな袋を加えて、体育館を不思議な空間にした。(え)



びじゅつかんの旅

「一緒に見る」

美術館では、福田平八郎と宇治山哲平の表現の違いを見ながら、好きな作品を探す。福田平八郎の描く余白の空間に興味を持ったり、宇治山哲平の絵の具のマチエールが気になったり。(え)



大分県立豊学校 幼稚部 (大分市)

びじゅつかんの旅したく

「えのぐであそぼう」

長さ5mの大きな紙に、ローラーでながーい線を描いたり、紙の筒でスタンプを押したり。手に直接絵の具をつけてベタベタ押ししてもOK!子どもたちはからだ全体をつかって絵の具体験を楽しんだ。遊んでいるうちに、絵の具を混ぜたり重ねたりと、新しい色や形をつくる楽しさを発見した子どもも現れた。出来上がった作品は学校の壁に展示してもらった。(さ)



びじゅつかんの旅

「一緒に見る」

1階アトリウムのいろいろな作品に触れたりして、美術館体験を楽しんだ後、展示室に行って作品鑑賞とワークショップ。宇治山哲平の作品をみんなで見たあと、○や□、いろいろな形に切ったいろがみを台紙に貼って、自分なりのミニ宇治山作品を制作。お話をしながら自分の好きな色や形を選んで、思い思いの表現を楽しんだ。(さ)



大分県立盲学校 小学部 5・6年生 (大分市)

びじゅつかんの旅したく

「つなげて段ボール」

子どもたちは、段ボールのピースを一つ一つ手に取り、先生と一緒に、手で形を確かめながら、交互に差し込んでつないでいった。作品を大きくしていく中で、つくりたいものの全体のイメージが膨らんでいった。最後は自分よりも大きな作品になり、友達の作品を触ったりしながら鑑賞会をした。(さ)



びじゅつかんの旅

「さわってみよう、いっしょにみよう」

最初に、マルセル・ワンダース氏の作品に触れて動かしたり、ミヤケマイ氏のプール型作品に寝転がったりと、からだ全体で1階アトリウムの作品を体感した。続いて展示室でコレクション展の鑑賞体験。まず宇治山作品のレプリカに触ることで、宇治山作品に描かれている形や、その質感を体感。そのあと、実際の作品を前に、その大きさ、描かれているものの色や形などについて伝え、作品のイメージをふくらませた。「美術館体験がとても楽しかった」といって、後日自分から美術館に遊びに来てくれた子もいて、とてもうれしかった。(さ)



【コレクションの見方・楽しみ方】

宇治山哲平《華厳 No.5》1978年

大人には見えていなくても、子どもたちには見えているもの。その一つは見立ての想像力によるもの。描かれているものを聞くと、思いもかけない答えがたくさん返ってくる。宇治山哲平《華厳 No.5》を視ると「ライオンがいる」「人もいる」「船がある」などなど、たくさんの形が見つかる。彼らの想像力は止まらない。作者は考えて描いていないかもしれないが、子どもに言われて改めて見返すと、確かにそう見えるものは少なくない。そしてもう一つ、子どもの視線だからこそ、よく見えるものがある。それは作品に使われている油絵の具に混ぜた水晶末や方解末だ。独自のマチエールをつくるため、宇治山は日本画の顔料である鉱物の粉末を混ぜている。そのザラツとした質感によるマチエールは、下から見上げるとキラツと光る。筆ではなく、ペインティングナイフを使うテクニックは、まるで鏝絵のような。大人でも、ぜひとも絵の前でしゃがみ込んで見上げてほしい。(え)



福田平八郎《茄子》1927年

福田平八郎の描く魚たちは、水を描いていないのに、水の存在を感じるから不思議だ。一方、水を徹底的に見つめて描いた水面、波紋、雪の降る石畳、そして瓦の上に降り始めた雨が瓦の熱さに蒸発してゆく様も描いた作品など、自然の現象・事象に向かう視線には、身のまわりを再確認させられる。しかし福田の視点は描かれた対象のみの世界で終わらない。ここで福田平八郎《茄子》を視てみよう。まずはどの茄子が一番おいしそうか。ぶくら太って瑞々しいものや、まだ硬そうなものもある。そして皮は、つぼみやこれから咲こうとしているもの、元気がよく開いているもの、匂が過ぎ散ってしまったものもある。よくよく視ると、茄子になりかけの小さい膨らみもある。他の黄色い花も咲いている。カボチャやキュウリだろう。3羽の雀がいて、そのうち1羽は虫をくわえている。3羽の関係は、親子だろうか、兄弟だろうか。そして見逃せないのが画面左端にいるトカゲ。左を向いているために、この絵の世界は画面の中で完結するのではなく、さらに画面の外へ外へと広がりをとっているのだ。福田の作品には、こうした外に視線の向かう動物や虫などの生き物が少なくない。画面の構成により、絵の世界観が広がるのだ。絵から離れて視ると、植物の生命力を感じるとともに、トカゲの目線とカボチャの先に、空間が広がっていた。(え)



小4ミュージアムツアー

大分を代表する二人の作家の作品やゆかりの品が交互に現れる展示によって、子どもたちは、一人の作家の作風の変遷や、二人の作家の作風の違いなど、様々な見方を楽しんだ。大きな作品を見て、ひとつ前の展示室のスケッチや遺品を思い出し、「さっきもあつたよ!」「あれがこの絵になつたんだ!」などと作家の制作の過程に気づく子どももいた。ガイドスタッフと一緒に作品を視ることで、子どもは様々なことを連想したりして、楽しく作品鑑賞をした。(さ)



●参加校

- 杵築市立山香小学校
- 竹田市立豊岡小学校
- 竹田市立城原小学校
- 竹田市立宮城台小学校
- 別府市立南立石小学校
- 宇佐市立宇佐小学校
- 宇佐市立院内北部小学校
- 豊後高田市立香々地小学校
- 日出町立藤原小学校
- 由布市立立谷小学校
- 姫島村立姫島小学校
- 中津市立今津小学校



コレクション展 V 旅する美術

2019年12月6日(金)～2020年2月4日(火)
前期 12月6日(金)～1月7日(火)
後期 1月9日(木)～2月4日(火)

コレクションから活動を振り返る

本展では、「旅」にスポットをあて、古今東西の多様な表現手法を、旅を愛する作家の心情とともに紹介した。あわせて、昨年度新しく収蔵となった放浪の詩人画家・佐藤溪が全国各地で描いた素描を最後のコーナーに特集展示した。

第1室は「旅を描く・旅を想う」と題し、江戸時代後期に隆盛した文人画(南画)と浮世絵から新版画、さらに創作版画を展示。文人画でも「旅」は重要な要素であるが、実景を描いた作品は少ないため、長崎や関西など旅先で描かれた作品や驢馬に乗って旅する作品を展示した。歌川広重などの「名所絵」も多く紹介したが、企画展「The Ukiyo-e 歌川派」開催直後という理由から、4点のみの展示にとどまらざるを得なかったことは残念であった。第2室は「旅先にて描く」。昭和以降、ヨーロッパや日本各地を作家が実際に旅し、その地で制作した作品やその経験から生まれた作品を展示した。いずれも作家たちの驚きや感興を、直接的に伝える鮮やかな色調の作品が多く、自らの旅の思い出などを語る鑑賞者も見受けられた。続く、第3室は「故郷・おおい

を旅する」。高山辰雄、岩澤重夫、河合誓徳などが大分の各地を訪れて制作した作品を紹介。いずれも自らの思い出や故郷への想いを重ね合わせた作品群であり、懐かしい温かさを感じさせる展示空間になったのではないと思う。

最後の第4室は「異境への旅、心の旅」。こちらは一変して、現実世界ではない、死後の世界への旅立ち、旅立った人々への想いを重ねた作品を一堂に展示。担当者として「心の旅」や「人生の旅」を意識し、日本画家・正井和行の作品を中心に内省的風景画を紹介した。湖畔に残された朽ちた船を描いた《補陀落の海》の前に、豊福知徳《流民》(木彫)を併置するレイアウトは、展示構成段階からぜひやってみたくて考えていた一つであった。学芸課内ではこのコーナーは「あの世の部屋」とも呼ばれたが、「この展示コーナーが一番印象に残った」「面白い趣向ですね」など、多くの好評の声をいただくことができた。このように振り返ると、いわゆる「彼岸」という切り口で最後をまとめた「異世界」という視点も別コーナーにあると、さらに変化に富んだ「美術の旅」を楽しんでいたただけかな?とも考えている。



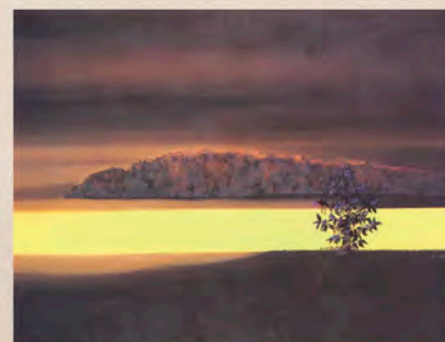
担当学芸員
池田 隆代 Takayo Ikeda

大分県立美術館 学芸企画課 主幹学芸員
奈良県から大分県に移り住んではや四半世紀。
大分県立芸術会館⇒大分県庁を経て、2019年4月からOPAMへ。丸いモノ、ふわふわしたモノ、美味しいモノ、カラダにいいモノに弱いです。

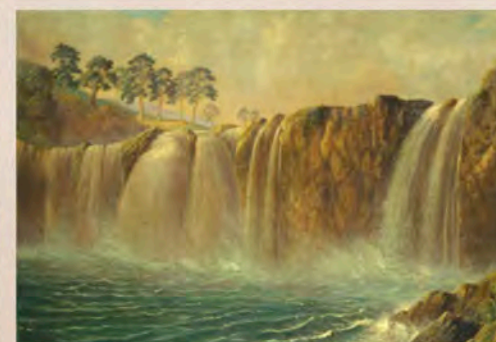


高橋草坪《雪後騎驢図屏風》文政後期頃
●雪のえがとでもきれいでした。またみにいきたいです。
●富士山みたいな山がたくさんあった。

河合誓徳《彩》1990年
●おこさまらんちみたい。
●眼鏡ケースみたいな形だった。



糸園和三郎《土塊》1981年
●はじめは山に見えたいけど、だんだん人に見えてきた。
●きいりの川がここらにのこりました。
●川に日の光があたって黄色にかがやいてきれいでした。
●きいりの川の右がわに花があって、そのおくに人がたみたいなのがありました。自分が感じたのは、はかだとおもいます。



譚山麗吉《沈墮之瀧》1901年
●なみがあって、その場所にいるように感じた。
●あぶらえは本物そっくりにかけるとなりました。
●ほんとうにジャーというときの音がきこえそう。
●水しぶきやなみがとてもリアルにひょうげんされていて、すごかった。

【コレクションの見方・楽しみ方】

正井和行《補陀落の海》1982年

月が見え隠れする。正面から見ると三日月が銀色に輝くが、右前方からみるとまるで雲の中に月が隠れるように見えなくなる。絵を見ながら歩くと、本当に月が現れたり、消えたりするから不思議だ。これは絵の具の特性を生かした描き方だが、この変化を発見すると、子ども大人も、すごい、すごいと大喜びする。しかし、この不思議さ、面白さばかりをクローズアップしたのでは、絵画の良さを感じず終わってしまう。作品に近づき、しゃがんで見上げると、岩絵の具の粒子がキラキラと光り、まるで雲の間から見える星のよう。朽ち果てた舟は、いつの時代のものだろう。うっすらと月明かりで照らされる役目を終えた舟の前をゆっくりと歩いてみる。ただ絵の前に佇むだけで、何やら心が静かに落ちつき、美しさに満たされたいだろうか。じっくりと絵の前で作品と向き合う時間をつくってほしい。(え)



●ちょっとうるしにいて、右や左にどうしただけで、月がもかくれた!
●なにもかいていないかとおもったら、白く月がみえました。
●みかづきがとでもすてきだった。
●見るところをかえたら見えたりきえたりして、とてもたのしい。



高山辰雄《旅の薄暮》1986年
●ドアが内びらきか外びらきか分からなくて不思議だった。
●お母さんに不思議トビラを見せたいです。
●上のほうは手前にドアを引いている感じで、下のほうは、おくにドアがいてる感じでおもしろかった。
●はだが青白く、ドアからこっそりみているようだった。
●地面がでこぼこして、かべにはもようがあってすごいと思った。



岩澤重夫《豊山豊水 夏 日田火水の宴》1991年
●花火の光る部分がほんものみたいにきれいだった。
●さかさまからみると、せんごうはなびにみえてすごい。



豊福知徳《流民》1957年
●木のふねに4人って、バランスがわるそうかんじてた。
●ふねにのっている人のまねをして、自分じんでさくひんをかじりました。
●まきものみたいなのをまいていた。
●1人1人の気持ちがちがうのか、同じなのか、という感じがおもしろかった



●あぶらえはともきれいで、少しポップとなっているところがよかったです。
●ついで昔は色をつけたりしていたのが、すごいと思いました。
●自分たちでなまえをつけたり、ともだちのいけんをきいたりできたので、たのしかった。

●その人がどんな気持ちでかいたのか、考えながらみるとすごいのがあった。
●かたいえのぐをつけていて、とびでた。

●がいでんもたのしそうでした。またびじゅつかんにいきたいです。
●きらきら光ってともきれいな絵がありました。ほうせきもついていると聞いて、びっくりしました。
●えのぐがもりもりとあって、ほかの作品とはちがっておもしろかった。

●雪がふっている港は、ちかくでみたらざつみだりだったけど、とくでみたらきれいだった。
●美じゅつ館は絵だけだと思っていたけど、ほかにもおきものなどがあっておもしろかった。

びじゅつかんの旅・旅したく 小4ミュージアムツアー

コレクションから活動を振り返る



大分市立大道小学校 1年生 (大分市)

びじゅつかんの旅したく

「ころころピンポンこれぞどうだ! 10,000個のメガ花火2019」

昨年に続き、小学1年生とその保護者、弟妹も加わったファミリーPTAで「ころころピンポン」を行う。総勢200名が、持てるだけ持ったピンポン玉を空中高く投げ上げると、体育館中に歓声が響き、圧巻だった。(え)

びじゅつかんの旅

「一緒に見る」

学校から歩いて美術館へやって来た子どもたち。20グループに分かれて、アトリウム、天庭、展示室の作品を見る。「山の中を誰かが歩いている」「あ、ここに行ってみよう」「あれ?月が見えてきた」。展示室には気になる絵や不思議な絵がある。彼らは歩いて美術館に来られる距離の所に住んでいるので、休日には家族と一緒に、もう少し大きくなったら友達同士で来てほしい。(え)

学校法人 別府大学 明星幼稚園 (別府市)

びじゅつかんの旅したく 一年少組・年中組

「宝石ピカピカ」

石は磨けば宝石、砕けば絵の具のもと、顔料になる。ラピスラズリをはじめ、アメジスト、アマゾナイト、タイガーアイなど、宝石にも顔料にもなる石を紹介し、好きな小粒をパネルに貼った。その後、30mのアルミホイルを引き出し、振って音を出す。空中に浮かせると、ゆっくり舞いながら落ちてくる。小さく切った手のひらサイズに丸め、床でこするとピカピカに光り輝いた。石を貼りつけたパネルを台座に並べると、とてもきれいだ。(え)



豊後大野市立緒方中学校 3年生 (豊後大野市)

びじゅつかんの旅したく

「コミュニケーション・スティック&超・ぼわんぼわん」

はじめにコミュニケーション・スティックでウォーミングアップ。その次は等身大のビニールを持って走ると、簡単に大きな風船ができた。そして一辺13mの特大ビニール袋を送風機で膨らませる。徐々に大きくなる風船に興奮した。(え)



びじゅつかんの旅 一年長組

「一緒に見る」

コレクション展を1グループ4~5名に分かれて見に行く。作品の中から、私も行ってみたいところを探してみたり、作品と同じポーズをとってみたりした。座ってお話ししながら見ていると、あっという間に時間は過ぎてゆく。最後にアトリウムの作品もしっかり楽しんだ。(え)



びじゅつかんの旅

「ふわもこギャラクシー+一緒に見る」

緒方町からの「びじゅつかんの旅」は、お弁当を持っての一日遠足に近い。美術館では布を膨らませるワークショップ「ふわもこギャラクシー」を行う。こうした体感ワークショップを行った後は、身体も心もリラックスして作品を鑑賞することができる。3階のホワイエの空間と天庭の作品をみんなで見たら、グループに分かれてコレクション展示室に入る。ここでもみんなで鑑賞するのが基本だ。友達同士、おしゃべりしながらのギャラリーツアーは、あっという間だった。(え)

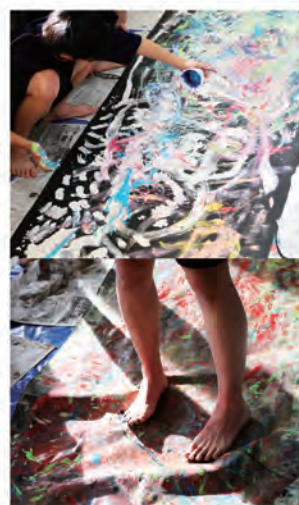


大分県立豊学校 高等部 1・3年生 (大分市)

びじゅつかんの旅したく

「アクションペインティングに挑戦」

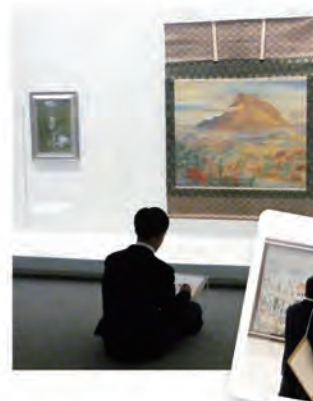
長さ5mの黒いロール紙に、グループごとに分かれてアクションペインティング体験。一人一人が、液体粘土と絵の具を混ぜてつくった「とろとろ絵の具」を、手や足で直接塗ったり、ローラーでのぼしたり、紙の上にたらしたり飛ばしたり。思い思いの表現を自由に試した。最初遠慮がちに描いていた生徒も、時間とともにイメージや新しい表現のアイデアがわいてきて、次々に新しい技法にチャレンジした。画面の上で点や線、色が重なったり混ざったりして、時間とともに思いもよらない方向に作品が変化していく過程を楽しんだ。(さ)



びじゅつかんの旅

「一緒に見る 美術館でスケッチ」

美術体験の後は、美術館体験と鑑賞を合わせたワークショップ。まずはコレクション展での作品鑑賞。その後、自分が気になった作品を選んで鉛筆でスケッチ。描かれている作品の全体や一部をしっかり観察して、鉛筆で自分なりの表現をした。中には、作品から受けたイメージをもとに自分なりのストーリーを組み立てて表現する生徒もいた。みんなの観察力や想像力にびっくり。(さ)



大分県教育センターボランの広場 (大分市)

びじゅつかんの旅したく

「器 for you~焼き物の器づくり」

焼き物の器づくりのワークショップ。粘土を伸ばしながら、つくりたいもののイメージが湧いてきた。形を工夫したり模様を凝ったりと、一人一人がアイデアを生かして、オリジナルの器をつくった。制作の後はお互いの作品を見合うミニ鑑賞会。この後、焼成を経て自分の作品がどう変化するか、とても楽しみ。(さ)



びじゅつかんの旅

「一緒に見る」

1階アトリウムの展示作品を見たり、触ったりした。コレクション展示室では、作品に近づいたり離れたり、一部を隠して見たりと、いろいろな見方をすることで、見えなかったものが見えてきたりして、作品に対するイメージも膨らんだ。(さ)



小4ミュージアムツアー

「これはどこの国かな」「この人はどこに行くのかな」「季節は、時間は、いつかな」「この人たちは何を話しているんだろう」。旅にまつわる様々な作品から、子どもたちはいろいろなことを思い浮かべ、自分なりの見方をした。近づいたり、見る角度を変えたりすると、見えなかったものが見えてくる不思議な作品にも驚き。大分県の風景を描いた絵や、見おぼえのある風景の絵を見つけたり、自分が作品の中に入り込んだ気持ちになったりして、多くのことを感じ取っていた。(さ)

●参加校

- 中津市立和田小学校
- 宇佐市立長洲小学校
- 九重町立野上小学校
- 大分市立田尻小学校

コレクション展 VI 美の女神たち

2020年2月7日(金)～4月7日(火)
 前期 2月7日(金)～3月3日(火)
 後期 3月5日(木)～4月7日(火)

本展は美術作品に表現された女性の姿を中心に展示した。女性美をテーマとする美術表現の歴史は古く、例えば、西洋美術ではミロのヴィーナス(紀元前2世紀後半頃)が思い起こされ、日本美術では高松塚古墳壁画の「女子群像」(8世紀頃)や、正倉院の「鳥毛立女屏風」(8世紀)などが知られる。

本展では、江戸時代の浮世絵師たちが定着させたジャンルである「美人画」に描かれた理想の女性像をはじめ、芯の強さや優しさといった女性の内面描写をよりリアルに追求した近代以降の絵画、版画、彫刻作品などを、当館のコレクションから厳選して紹介した。優美、可憐、気高さ、そして官能性や神秘性をも内包する多彩な女性美の世界をご堪能いただいた。

この展覧会では、とくに吉原真龍(1804-1856)という京都画壇で活躍した美人絵師に注目した。実はこの真龍という絵師は、国東半島の真玉の生まれ。その気品ある美人画は、京で人気を博し、江戸期から近代にかけての京都画壇における美人画の基調をつくっている。近代美人画

の巨匠・上村松園(1875-1949)も京の美人画家の系譜に連なるが、その松園が制作の参考とした画家の一人が、真龍だった。真龍と松園、新旧の京都画壇の優美な美人画の競演をねらった構成とした。

展示後半は、近現代美術の女性像をご覧いただく流れである。人間存在の神秘を問い続けた日本画家・高山辰雄をはじめ、朝倉摂、小野一郎、江藤久美など、とくに戦後の日本画壇において、日本画の伝統的なスタイルに拘らず、新しい表現を切り拓いた画家たちの女性像を特集。高山辰雄は、女性の豊満な体そのものの神秘的造形性を大らかに描き、朝倉摂や小野一郎らは、複雑化する社会に生きる女性の孤独や不安を堅固なフォルムで表している。また、江藤久美は、女性の繊細な内面を表象する様々な現代的な女性像を、華麗な装飾性とともに描いた。さらに洋画では「肖像画」や「裸婦像」にみる女性像を特集し、とくに中山忠彦が一貫して描き続けた華麗な着衣の迫真的な女性像を特集した。

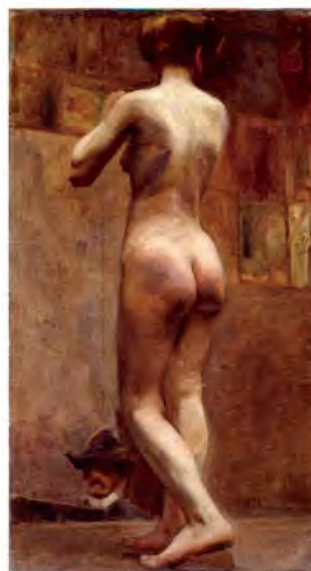
担当学芸員 宗像 晋作



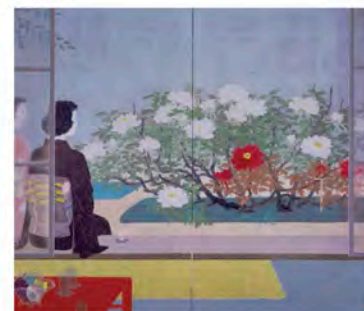
上村松園《月蝕の宵》1916年



アンリ・マンガン《裸婦》1922年



中村不折《裸婦立像》1903年

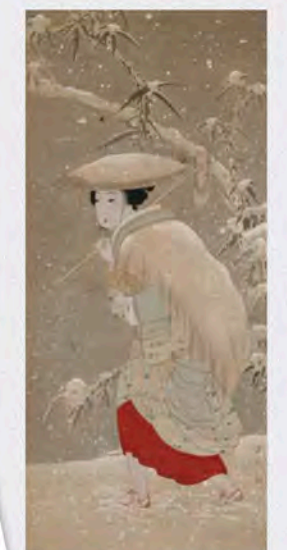


池田栄廣《閑庭》1953年

コレクションから活動を振り返る

【コレクションの見方・楽しみ方】 吉原真龍《雪中美人図》 江戸時代末期

雪の中を歩くキリッとした視線の女性。よく見ると素足だ。江戸末期頃に描かれたこの絵は、荷の好きな母のため、真冬に竹林に入り、荷を見つけて採ったという親孝行の話をもとに、当世風の美人に見立てて描かれている。間近で視ることができると、描いている人と同じ視点になることができる。徹底的に細かい筆跡を見てみよう。黒の中に、一本一本描かれた髪の毛や、二重瞼に長いまつげなどの細密描写が魅力的だ。竹の幹も葉っぱも、濃淡による筆の勢により描かれている。その勢いが、雪が降り積もったにもかかわらず、竹に生命力を与えている。墨で描いた上への着色表現だが、ひととき襦袢の赤が目を引き、OPAM所蔵の吉原真龍の描く美人画は、みんな下唇が緑だ。これは当時流行った笹色紅という口紅。紅花からつくられる貴重な口紅で、とても高価な品物だった。今回展示されている《美人図》《納涼美人図》《美人と子供》《官女図》そして《桜下美人図》にも描かれているので、見比べてほしい。そしてこの《雪中美人図》は、ちょっと塗られた笹色紅と、袖口からちらっと見える赤の補色対比が美しい。この二つの色により、一層色香が増したのではないかと言うのは、言い過ぎだろうか。ぜひ実物で確かめてほしい。(え)



学校法人 いずみヶ丘学園 どんぐり幼稚園・しいのみこども園 年長組 (豊後大野市)

びじゅつかんの旅じたく 「雪の結晶魔法陣」

くるくる回すのは難しいが、描き出される模様は、「きれい」「すごい」と感動、興奮する園児たち。デザイン定規を使った模様は、切り紙細工を交え、大きな円形模様を床いっぱいにつくった。(え)



びじゅつかんの旅 「一緒に視る」

毎年、園から駅まで歩き、電車に乗って、また歩く。彼らにとって「びじゅつかんの旅」は、卒園前の一大イベントだ。初めに、視る準備運動として、アトリエ内の動物を探す。天井に隠れるライオンやウサギをすぐに見つけた。隣の体験学習室に飾ってある、「旅じたく」でつくった雪の結晶魔法陣も見えた。コレクション展示室では、彫刻や絵画に登場する女の人のポーズを真似るだけでなく、梅の木や花のスケッチ、そしてお菓子の器も身体で表現した。今日の思い出はきっと心に大きく残るだろう。今度は家族と一緒に遊びに来てほしい。(え)



とっておきの旅・旅じたく

コレクション展が休展中も楽しめます！

大分市立春日町小学校 3年生 (大分市)

びじゅつかんの旅じたく

「ころころピンポン これとどうだ!10,000個のメガ花火」

ピンポン玉と戯れる体感型ワークショップ「ころころピンポン」は、人数や場所によって、ピンポン玉の数が異なる。春日町小学校の子どもたちは約100名、10,000個のピンポン玉が体育館中を跳ねまわった。(え)



びじゅつかんの旅

「一緒に視る」

コレクション展は休展中なので、企画展「The Ukiyo-e 歌川派」を視る。遠近法を取り入れた風景画に感心し、役者絵では同じポーズをとってみる。目を凝らしてみると細かい線や模様が見えてくる。版画とは思えない表現に目が釘付けになった。(え)



大分大学教育学部
附属小学校 3年生 (大分市)

びじゅつかんの旅

「石の話」

クラスの中で、絵の具は石からできているらしい、という話が広まった。その真相を確かめようと、3年生の子どもたち33名が美術館へやって来た。そこで教材ボックスを使って石の話をした。普段はガラスケース越しに見るだけの教材ボックスから、石を次から次へと取り出し、砕いた顔料とともに紹介する。目の前のキラキラと光る結晶化した石に、目を丸くする子どもたち。砕いてすりつぶすところまで実演したが、「やりたい!」「やりたい!」と声があがった。館内での顔料制作はできないが、これだけ興味を持って見ていた彼らとは、いつの日か一緒につくった顔料で絵を描きたい。(え)



大分市立大在小学校
特別支援学級 1~6年生 (大分市)

びじゅつかんの旅

「ふわもこ一緒に視る」

コレクション展や企画展が開催されていない期間の「びじゅつかんの旅」は、2階アトリウムでワークショップを行い、館内ツアーに出かける。この日のワークショップは布と戯れる「ふわもこ」。館内ツアーは2階の教材ボックスを眺めつつ、1階を見下ろしてから降りる。アトリウムでは、マルセル・ワンダース氏の作品を揺らしてみたり、近寄って昆虫を探してみたり。須藤玲子氏の作品を見上げると、2階から見ていた時よりも、布の凹凸がよくわかる。ミヤケマイ氏のプール型作品は泳ぐ真似ができるので、大人気だ。3階のハワイエでは天井を見上げ、床の石からハート模様を探し、天庭の作品を不思議がって見た。(え)



コレクションから活動を振り返る

大分県立盲学校 小学部 6年生 (大分市)

びじゅつかんの旅

「一緒に視る」

「学校の図画工作の授業での版画づくりに向けて、いろいろな作品を見て参考にしたり、意欲づくりをしたい」ということで、大分県立盲学校の6年生と先生が2人で、企画展「The Ukiyo-e 歌川派」を見にやって来た。児童は、1点ずつ、先生の説明を聞いたり、先生に質問したりしながら、作品の様子を感じ取っていた。人物を描いた作品の前では、先生と一緒に絵の登場人物のポーズをまねたり、作品に近づいて大きさや色合いを確認したりと、からだ全体を使った鑑賞体験もした。この後の学校での作品づくりは楽しくできたかな?(さ)



ガイドスタッフ研修 小4ミュージアムツアーのための鑑賞講座

教育普及の目的は「自分の視点を持つ」こと。これができるれば、自ら美術館で作品を楽しむことができる。開館以来、OPAM教育普及のギャラリーツアーは、子どもたちと作品を「一緒に視る」というスタンスで行っている。これは小4ミュージアムツアーでも、びじゅつかんの旅でも、みんなの土曜アトリエでも変わらない。みんなで作品を見て楽しむ。それはガイドスタッフ自身が、それぞれの視点をつくることに結びつく。(え)



小4ミュージアムツアー 引率教員のための鑑賞講座

小4ミュージアムツアーで子どもたちを引率して来る先生たちにも、作品を視ることを一緒に楽しんでほしい。だから事前の研修でも、純粹に視ることを楽しんでもらう。この研修で、小学校の先生自身に視ることの楽しさを感じてもらえれば、当日、子どもたちにも作品を視る楽しさが伝わるだろう。(え)



1階アトリウムで子どもたちに 大人気の作品



ミヤケマイ
《水府 覆水難収・フクスイオサメガタシ》
●ガラスみたいなのに海の生き物がいて、とってもおもしろい。

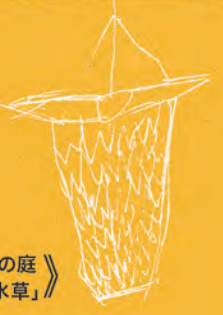
- ぼくは海の生きものがいるのがすきでした。プールがあって生きものがいた5たのしうだから。
- プールの中は水みたいだけどかたくて、そのおくにうまっているものがあって、すいこまれる感じがした。
- おふるのような、プールのようなものが楽しかった。
- 5円玉や500円玉、カギや女の人がいたのですこいと思った。
- ガラスは、きゅきゅとしていた。
- 中に入ったとき、本当にプールに入りたいだった。
- さわってみて、みずみたいになんじがした。
- プールにかぎがおちているのをーばんさいしよに見つけました。
- プールにさわったら、はもんができた。
- プールにいろんな物がかくれていて、見つけるのがたのしかったです!

マルセル・ワンダース 《ユーラシアン・ガーデン・スピリット》

- たまごから、きょうりゅうの音がした。
- たまごに虫やかおがかくされていて、とおくから見た5ドクロがあった。
- たまごとおくから見た5目や口があるように見えた。
- たまごをおして、たのしかった。
- はなや虫がいてたまごが大きくてとてもおもしろかった。
- たまごのやつをおすと、ゆれてたおれそうでおれなからすこいと思った。
- たまごをさわったら、ゆらゆらゆれていてこわかった。
- たまごをさわってみたら、プヨプヨしてた。
- おしてももどって来たたまごを見て、おどろいた。

須藤玲子 《ユーラシアの庭 「水分峠の水草」》

- 水くさがとってもすこかった。
- 夜電気がついたところもみたかった。こんどみにこようと思いました。
- でかくてそんざいかんがあつたから、心にのこりました。



※びじゅつかんの旅・旅じたく、小4ミュージアムツアー：文(え)榎本寿紀 (さ)佐藤収、●印のコメントや絵は子どもたちの感想文より

アウトリーチ 空を眺めて

— 美術館に行く準備 —

「今度できる新しい美術館に行くのに、何を勉強してから行ったらいいですか?」。大分県立美術館が開館する前、高校生からの質問に初代館長・新見隆は、「美術館は勉強の場所ではないので、勉強するつもりで来ないように」と答えた。そして美術館で作品を見るときは、見る準備をしておいてから「素」の自分で見ること。その準備とは美術の勉強をすることではなく、今日の空は青くてきれいとか、風が気持ちいいとか、草木の緑が鮮やかだとか、日々の空気や気配を感じて、自分の感性を「素」の状態に戻すことだと話した。美術館に来る準備、それは「空を眺めてから来てください」ということだった。中には「冗談を言ってるの?」と疑問を持った生徒もいたようだが、なんといい言葉だろうと思った私は、準備室時代に始めたアウトリーチのテーマとタイトルは、「空を眺めて」と決めた。

大分県は公共交通機関の整っていない地域も多く、そんな地域の学校から大分市内の県立美術館まで行くのは大変だ。来られないなら、こちらから行く。美術館に行く機会の少ない子どもたちの住む地域で美術体験を行えば、大人になっても美術館が身近と思える存在になるかもしれない。そんな思いから準備室時代、アウトリーチに出かけ、行く先々でワークショップを行った。その内容は「空を眺める」ごとく、風や空気、そして時間や場所を体感するワークショップだ。事前授業でもなく、作品を視るための意識を高めるといったことでもない。楽しく作品を視るためには、心も身体もウキウキすることが大切だ(感性の活性化)。そして我々美術館スタッフと仲良くなれば、美術館に行くのが待ち遠しくなるかもしれない。これが後の、子どもたちが美術館へ旅をする「びじゅつかんの旅」の準備として、我々が事前に学校を訪ね、身体と感覚を活性化させる美術体験「びじゅつかんの旅」につながるのだった。

— あの作品、あるん? —

なんととしても美術館に来てほしい。実物を見てほしい。どこかに出かける「旅」。そこでは新しい出会いが待っている。どんな出

会いが待っているだろうか、期待に胸を膨らませる時間はワクワクする。こうして生まれたのがアウトリーチの体感型ワークショップと、視るワークショップであるギャラリーツアーを組み合わせた「びじゅつかんの旅・旅したく」だ。旅には日常とは異なる新しい出会いの要素も含まれる。

今年度の「びじゅつかんの旅したく」で中学校に行った時、帰り際にある男子生徒が言ったひと言は印象的だった。「火とか燃やして描いた作品、あるんですか?」。開館記念展「モダン百花繚乱『大分世界美術館』」で展示した蔡國強(ツイ・グオチャン)の作品「私はE.T. 天神と会うためのプロジェクト」(福岡アジア美術館)のことらしい。「火薬で描いた作品かな?」「そう、それだ」「ごめん、あの作品は他の美術館から借りてきたもので、OPAMにはないんだ」。少し残念そうな顔をしたが、「そんなに貴重なものだったんですか?」と言った。彼は小学5年生のときに、県内6万人の小学生を招待する小学生ファーストミュージアム体験事業に参加していたのだ。同事業では、多人数による短時間の鑑賞は意味がないのでは、と嘔く人もいた。しかし彼の心に展示会の記憶はしっかり残っていた。子どものころ美術館に来たことがあると、大人になってまた美術館にやってくる。家族で来たのなら、その確率はもっと上がる。アムステルダム国立美術館でもその統計結果が出ているし、全国の美術館の教育普及担当学芸員、エデュケーターの間でも「あるある」の話だ(「楽しい美術館」p54参照)。

— アウトリーチ、いろいろ —

アウトリーチのワークショップには二つのタイプがある。一つは美術や美術館から離れていると思われるところと連携して行うものだ。準備室時代より、物理的に遠距離の地域、そして美術館で作品を視るという行為から遠いと思われる盲学校から、アウトリーチを始めた。大分は県内全域が博物館と思えるほど、自然・文化が豊かだ。地域の特色を生かす方法の一つとして、地域の鉱物や植物などから絵の具をつくるワークショップを行った。また五感のミュージアムを謳う大分県立美術館として、盲学校では主に触覚や聴覚に注目したワーク

ショップを行ってきた。

そしてもう一つは、県内の園や学校に広く声をかけて行うものだ。以前は美術館体験とワークショップを組み合わせる「びじゅつかんの旅・旅したく」だけだったが、美術館に来られない子どもたちに美術館を少しでも身近な存在と感じてほしく、昨年度からワークショップのみの活動も始めた。その中でも嬉しかったのが、昨年度、アウトリーチでワークショップを行ったことも園が、今年度、「びじゅつかんの旅・旅したく」に申し込んでくれたことだ。美術館までの交通手段を手配しなければならないため、アウトリーチのみに比べてハードルは高い。しかもお昼ご飯を挟んで滞在時間はなんと4時間。これは徹底的に楽しむしかない。ワークショップ、そして館内の見学、コレクション展示室のギャラリーツアーと、一日たっぷり美術館を楽しんだ。

開館初年度は「びじゅつかんの旅・旅したく」に加え、「びじゅつかんの思い出」というアウトリーチ・ワークショップも行っていた。子どもたちの来館後、ふたたび我々が学校へ行き、美術館で過ごした印象を、手を動かすという能動的な行為を加えることにより、印象深いモノにしようというものだ。ある中学校では、展示室で彫刻と同じポーズをとってみたり、絵画作品に紛れ込むイメージで写真を撮り、翌週その写真を持って再び学校を訪れ、飛び出す絵本形式の大型作品を三人一組で制作した。いくつかの基本構造を提示し、どのような仕掛けにするか、何をメインにするかのストーリーを考える。当初、2時間で終わるはずだったが、美術の授業や放課後を制作時間にあて、総制作時間に2か月を費やし、年末に完成した作品を美術館に展示した。思い出を形に残す。それは、また行きたい、今度はどんな旅にしよう、という気持ちにつながる。さらにこうしたことが将来、家族で、友人と、あるいは一人での美術館来館につながることを期待しての活動だった。しかし残念なことに、今では参加校が増えてしまい、「びじゅつかんの思い出」には行くことができなくなってしまった。今後、また新たな形で復活させられればと考えている。

アウトリーチは、ワークショップを行うだけではない。地域に美術館所蔵の作品を持って行くこともある。いわゆる移動美術館だ。作品を数点のみ持って行く鑑賞型「視るワークショップ」も行っている。しかし温度、湿度、防虫などの管理が行き届かな

い空間に展示することを考えると、保存の観点からは非常に厳しい。蔵にしまい込むのではなく、活用を!との思いもあるが、年間を通じて開催時期を選ばないと、作品に優しくない。今だけではなく、これから生まれてくる子どもたちが作品を楽しむためには、作品の素材、支持体、絵の具層、そしてコンディション等を考えて行わないと続かない。実物と向き合えるのが美術館のよいところだからこそ、アウトリーチは様々なことをしっかり考えた上で、活動を継続していきたい。

— やっぱり先生 —

こうしたアウトリーチができるのは、何よりも熱意のある先生あってのことだ(p3-4「みんなが大人になったとき」参照)。先生が別の学校へ異動してしまうと、その学校で続かなくなる場合もある一方、異動先の学校で実現することもある。もちろん周りの先生方を一から説得しなければならないので、先生の苦労は想像に難くない。今年度は、美術担当ではない学年主任の先生から、ぜひ「びじゅつかんの旅・旅したく」をやってほしいと申し込みがあった。この先生は3年ほど前に行った他の中学校で、当時は学級担任をしていた。その時は美術の担当の先生に促され、これが美術?と思いながらも、非常に楽しかったそう。そして他の学校に異動し、今度は自らが申し込んで、しかも電車で来館。お弁当を持っての一日遠足形式で、美術館には4時間滞在できた。往復の時間、安全面、授業のコマ数と時間割の調整を考えると、そんなに簡単なことではない。先生の気持ちと行動力が実施に結びついた。

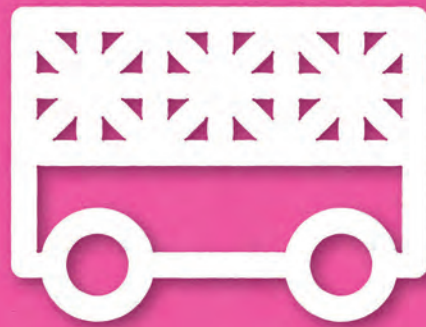
また昨年アウトリーチを行ったある中学校の美術の先生が、年末に来館した。子どもたちが、とても楽しかったと喜んでいることを、どうしても年内中に伝えたいと、わざわざ来てくれたのだ。多くの子どもたちに、まずは美術を心底楽しんでもらいたいと願っているからこそ、先生自身もうれしかったのだろう。私も、彼らとコレクション展示室で作品を視るのは、とても楽しかった。美術館は実物と向かい合えるところだ。思いを同じくする先生たちとともに、将来の来館につながることを夢見て、アウトリーチを展開していきたい。

榎本 寿紀

来られないなら、
こちらから行く

アウトリーチ・プログラム

outreach program



なかなか美術館に来られない子どもたちのところに、こちらから行くのがアウトリーチだ。美術館の作品をたくさん持って行く、いわゆる移動美術館を、学校と連携して行い、子どもたちを招待している。これが、地域美術館体験講座として行う「地域まるごと美術館」と「スクールミュージアム」。また地域の自然や文化の魅力を美術的視点から再発見する「地域づくり講座」も行っている。そして大人になったら美術館へ行くための準備を今からしよう、あるいは「びじゅつかんの旅・旅したく」に結びつくようにと、学校に出かけてワークショップを行っている。なかなか学校の授業ではできないことをやりたいので、身体と感覚を活性化する体感型ワークショップが多いが、つくって遊ぶ「工作ワークショップ」、元気に全身で描く「絵の具ワークショップ」、作品と出会う鑑賞型「見るワークショップ」なども行っている。

地域美術館体験講座 地域まるごと美術館 [竹田展]

絵のなかの旅

— ふるさと・名所・世界へ —

2019年6月12日(水)~21日(金)

会場 竹田市総合文化ホール グランツたけた 多目的ホール

古来、奥豊後の中心地であった竹田の地は、内陸交通の要衝として栄え、往来する多くの旅人によって積極的な文化交流がおこなわれた。竹田に生まれた豊後南画の大家・田能村竹田も、各地への旅をとおりて人々と交流し、多くの作品を生み出している。本展では、芸術家たちが各地への旅の中で刺激を受け、様々に描いた大分の風景、異国の風景・人物などの絵画や彫刻など、大分県立美術館の所蔵作品から厳選した約30点を紹介した。旅が促す文化交流の一面を、美術作品を通してじっくりご覧いただいた。

本展は、竹田市内の園児から中学生、そして一般まで幅広い年齢層を対象としていたため、とくに小さな園児や生徒

たちが興味を持ってくれるようなインパクトのある作品も選定して構成した。中でも真っ白な大理石を素材とした日名子実三の彫刻《フランスの女》(1929年)は人気を集めた。ガラス質を含む大理石は、照明の光の角度でキラキラと光る。石の素材の不思議、また固い素材で女性の柔肌や髪の毛を表現できることに驚いたようだ。その他、淵野桂樞の《陽目瀑図》(1879年)は「白水の滝」とも呼ばれる地元竹田の名勝を描いた作品で、実景を見たことがある来場者も多く、画家のユニークな視点や、絵の表現の面白さを堪能してくれた。

担当学芸員 宗像 晋作



淵野桂樞《陽目瀑図》1879年



日名子実三《フランスの女》1929年



福田平八郎《柿紅葉》1949年



竹田市総合文化ホール グランツたけた



来られないなら、こちらから行く

みんなの美術館体験



園児・児童・生徒を対象にした「みんなの美術館」。幼稚園児やこども園の幼児は、作品に描かれているものから別のものを見立てたり、自分なりのお話を作ったりするのが得意だ。小学生になると、描かれているものを根拠として、絵の中の風景に暮らす人の営みを見出したり、作品にひそむストーリーを考えたりする子どももいて、美術鑑賞が「表現力」や「読み取る力」を高める活動となっていることがわかる。中学生になると、自分なりの見方をし、考えを持ち、友達の考えと比較して違いを楽しむ姿が見られた。また、作品を見て「自分も同じ表現をしてみたい」「自分の好きな色で塗ってもいいんだ」といった言葉も聞かれ、子どもの表現に対する意欲の高まりも感じられた。

会場には、県立美術館や県内各地域の博物館の学芸員が毎日交替で作品解説をするコーナーを配置。色や形、素材などに着目したり、地域の自然や文化と作品を結び付けたりするなど、ガイドスタッフとは違った視点から作品の見方をレクチャーした。(a)



- 参加校
- 竹田市立竹田小学校
- 竹田市立菅生小学校
- 竹田市立祖峰小学校
- 竹田市立緑ヶ丘中学校
- 大分県立竹田支援学校中学部
- 竹田市立竹田南部中学校
- 竹田市立南部小学校
- 学校法人 稲葉学園 しらゆり幼稚園
- 竹田市立直入小学校
- 竹田市立都野小学校
- 竹田市立久住小学校
- 竹田市立萩小学校
- 竹田市立城原小学校
- 竹田市立白丹小学校
- 竹田市立宮城台小学校
- 竹田市立豊岡小学校
- 竹田市立都野中学校
- 竹田市立久住中学校
- 竹田市立南部幼稚園
- 竹田市立直入幼稚園
- 竹田市立直入中学校
- 竹田市立竹田幼稚園
- 社会福祉法人 愛の園福祉会 なおいりこども園
- 大分県立竹田支援学校小学部
- 竹田市立竹田中学校



ギャラリートーク

一般の観覧者が、県立美術館の学芸員の解説を聞きながら一緒に作品を見る「ギャラリートーク」を、午前と午後の2回実施。地域の美術に関心を持つ人たちが参加し、学芸員による「絵のなかの旅」をテーマとした作品についてのお話を聞きながら、作品鑑賞を楽しんだ。(a)



地域美術館体験講座 スクールミュージアム



来られないなら、こちらから行く

姫島の色

— 海がつなぐ歴史と文化 —

2019年11月15日(金)～17日(日) 11月15日(金)スクールミュージアム 11月16日(土)・17日(日)一般公開
会場 姫島離島センター やはず



江藤哲《海》1991年



工藤和男《初冬の海》1976年

国東半島の北に位置する姫島。ここには、とにかく面白いものが多い。盆踊りに車海老、黒曜石、アサギマダラなど。そのため、展覧会のテーマはいろいろと迷ったが、結局「海」ははずせないということで自己解決した。

収蔵作品の中から海をテーマに33点を選んで展示した。そのうち国東市国見町出身の江藤哲は、展示会場の建物など島内の至る所で作品を目にした。それだけ地元を愛し地元で愛された作家なのだろう。ほかには、海で働く人々を描いた作品や魚がモチーフの静物画、海辺を描いたターナーの版画など、なるべく幅広いジャンルになるよう心掛けた。

一番反響があったのは、福田平八郎の車海老の素描だった。ほぼ実物大の、食べごろの大きさということもあるのか、本物そっくりという驚きの声が多かった。描かれた海老は天然か養殖か、という議論が起きたのはまさに産地ならではの、とにかくその描写力の確かさを再認識した。



福田平八郎《車海老》1955年

今回の展覧会は、子どもたちだけではなく村の文化祭に合わせて一般にも公開した。おかげで観覧者は島民の約4分の1のぼった。正直、姫島から美術館は遠い。とても思い立って気軽に行けるものではない。だからこそ、これだけ多くの人に来てくれたのはうれしいし、学校の授業で来た子どもが次の日に家族を引き連れてまたやってきたりする、この手の事業ではよくある光景も、何だか本当に心にしみた。

担当学芸員
菅野 剛宏 Takahiro Hanno
大分県立美術館 学芸企画課 課長

福岡県最東端の町から毎日JRで通勤。車中でのまどろみの時間は欠かせない。茨城出身のため、トリニータとアントラーズの対戦はどちらを応援するかいつも悩む。好物は、純米酒、鱧、餃子、昔のCMなど。



魚の絵や、海で働く人々を描いた絵を前にした幼稚園児や小学生からは、「この魚は食べたことがある」「じいちゃんが捕ってくる」など実体験に基づいた発言が多くみられた。幼稚園児、小学生、中学生と、子どもたちの様々な思いがグループ内で出されていたが、作品の大きさや質感、迫力や繊細さなど、美術作品を直に見て体感することで、様々な気づきが出された。学年が上がるにつれて、油彩の大胆な筆使いや、版画

の微妙な線など、表現の違いに関心を持つ子どもが多くなっていくようだ。「ガイドさんや友達と絵を見てお話ができて楽しかった」「今度、真似して描いてみたい」「美術館に行っているいろいろな絵を見てみたい」など、美術に対する意欲の高まりを感じさせる感想も多く聞かれた。また、子どもたちにとって、ふるさとのすばらしさを再認識する良い機会となったようだ。(※)

アート体験講座「姫島の器」

講師：福永泰信(陶芸家)

スクールミュージアムの関連行事として、地元国見町に工房を構える福永泰信氏を講師として招き、陶芸体験のワークショップを2日間実施。1日目は一般の人が、2日目は小・中学校の子どもとその家族が参加。和やかな雰囲気の中、参加者はみな思い思いの器づくりを楽しんだ。作品は後日、福永氏の陶房にて焼成され、参加した皆さんの手元に届けられた。(※)



ギャラリートーク

県立美術館の学芸員の解説を聞きながら一緒に作品を視るギャラリートークを、2日間、両日とも午前と午後の2回実施。中には、早い時間から展示室で、ギャラリートークが始まることを待ってくださる方もいた。参加者は学芸員のていねいな解説を楽しみながら、作品鑑賞をした。(※)



●参加校

姫島村立姫島中学校 姫島村立姫島小学校 姫島村立姫島幼稚園 姫島村保育所

地域づくり講座 [国東市立安岐中学校]



平成29年度に美術館事業「スクールミュージアム」を行ったことをきっかけとして、大分県立美術館との連携が続いている安岐中学校で、地域の新しい魅力作りを目指した地域文化講座、ワークショップを実施。同校2年生は、職場体験学習を通して、地域の伝統文化や自分自身のキャリアについて学習している。「学んだことを、自分の言葉で表現・アピールする力をつけさせたい」「国際理解という観点から、英語を活用する力をつけさせたい」という先生方と共に、全国でも国東地方だけで生産されている七島蘭(しちとうい)をテーマとして学習し、別府市の立命館アジア太平洋大学 (APU) 学生との交流を通して「くにさき七島蘭」をアピールすることとした。



APU交流体験～美術館鑑賞体験

APUの構内で学生に声をかけ、七島蘭や、日本で学ぶ目的などについてインタビュー。協力してもらったお礼に、制作した七島蘭の作品を渡し、国東のアピールをした。英語でのコミュニケーションも、国東の認知度もまだまだだったので、これからやらなければならないことが見えてきた。学生たちはとてもいねいに応えてくれ、七島蘭の作品も喜んでもらえて、楽しい活動ができた。

この後、美術館を訪問し、企画展「The Ukiyo-e 歌川派」や、ラグビーワールドカップに関連した「Art of Wales」展などを鑑賞した。館内のベンチには七島蘭が使われており、実際に座って使い心地を実感。大分や国東、日本の文化の広がりを感じ、世界の文化の交流の場としての美術館を体感した。



七島蘭を使った作品作りワークショップ

講師：岩切千佳(七島蘭工芸作家)

七島蘭工芸作家として活躍している岩切千佳氏を講師に招いてのワークショップ。最初は「国東の文化と七島蘭について」と題して、自身の七島蘭との出会いから、作家として認められるまでのお話がなされた。伝統的な美術品・工芸品に新たな価値を生み出すべく日々取り組んでいる岩切氏の姿勢は、子どもにとって意欲付けとなった。続いてワークショップ「七島蘭を使った作品制作」で、お守りストラップ作りを体験。相手に使ってもらえる物を作ること、国東の良さが伝わるよう心を込めて作ること、などを意識して作品を作った。七島蘭の素材感や、縄を編む作業を楽しみながら、少しずつそのコツを習得していった。



取組のまとめ

取組の様子は、文化祭でステージ発表や展示物によって、参加した保護者や地域の方に紹介された。生徒たちの、地域文化の担い手としてのこれからの活躍を期待したい。(さ)



アウトリーチ・プログラム

来られないなら、こちらから行く

姫島村立姫島小学校 4～6年生 (姫島村)

「姫島色をつくる いのちの色～動物」

ヨーロッパで19世紀に流行したセピアは、イカ墨をインクとして使ったもの。このインクは酸化が進むと黒から茶色に変化する。大分県漁業協同組合 (JFおおいと) 姫島支店からコウイカの墨袋をいただき、ワークショップを行った。真っ黒な液体を、臭い、臭いと口々に言い合いながら取り出すと、すでに手は真っ黒。まずは線を引き、色を確かめる。そっと水面にインクを浮かべ、紙に写し取るマーブリングを行う頃には、臭いも気にならなくなった。ほかし、にじみ、かすれ、重ね描きを使って、各自、姫島の色をテーマに制作を開始。姫島の生の魚を描きたかったが、今回は写真を観察して描いた。作品を見ると、みんな海が好きなんだとよくわかる。

姫島村立姫島中学校 全学年 (姫島村)

「姫島色をつくる いのちの色～動物」

彼らは小学生だった3年前、アウトリーチで姫島の車エビを蒸し焼きにして炭をつくり、それを顔料に絵を描いた経験がある。その時はべっとりした感じで、ほかしにじませたりする描き方が難しく、苦労した。今回のイカ墨はなめらかで、描くときの筆運びが自由だ。中でもウニをアップで描いた男子3名は、目の付けどころが抜群。まさに「芸術家」だった。



姫島村立姫島小学校 1～3年生 (姫島村)

「ぼわんぼわん」

ビニール袋を持って体育館を走り回る。その勢いで袋は膨らみ、パンパンになる。端を結べば、あっという間に風船の出来上がりだ。ポンポン真上にはじいたり、乗ったりしても面白い。このビニール袋を、小さいモノから大きいモノへ。最後は布団乾燥機の熱風を入れると、ちょっとはじいただけで軽々と空中に浮かび上がった。子どもたちは歓声をあげながら転がしたり、乗ったり。興奮は止まらない。



佐伯市立宇目緑豊中学校 1年生 (佐伯市)

「ザ・ピグメント～宇目色をつくる 顔料からクレヨン・パステルへ」

彼らとは、小学生の時からワークショップを行っている。3年前に藤河内溪谷で拾った石から顔料づくりを行ったが、今回も同じところでたくさん石を拾っていた。顔料ができたら、①膠を混ぜて絵を描く ②蜜蝋を混ぜてクレヨンにする ③トラガカントゴムを混ぜてパステルにする、の3つのグループにわかれて行った。





来れないなら、こちらから行く

アウトリーチ・プログラム



国東市立国見中学校 3年生 (国東市)

「器をみる・つくる」

紙に切り込みが入っているだけで広がる空気の器、小鹿田焼をはじめとした陶器、デザイナーのつくった磁器、県産材を使った木の器、鍛金による世界に一つしかない器など、様々な器を見て触るワークショップを行った。触って、持って、重さや質感を体感すると、形の面白さとともに、使い方もイメージできる。その後、自分だけのオリジナルの器を紙で制作。カッターを使って細かい細工を行った器や、紙の表情だけを生かした大胆な器など、それぞれ工夫しながら楽しんだ。

宇佐市立院内中部小学校 2年生 (宇佐市)

「いざ、ハイキングへ」

色鉛筆を塗り重ねていくと、複雑に色が混ざり合い、色の変化が楽しめる。その表情を生かし、季節によって色が変わる山を表した。おぼけが住んでいそうな山、たくさんの動物たちで賑やかな山など、いろいろな山をつくり、寝転がって視線を低くして、小さくなってハイキングの気持ちで眺めた。



国東市立国見中学校 1・2年生 (国東市)

「ふわもこギャラクシー」

直径8mの丸い布で空気を包み込み、空気と戯れる「ふわもこ」。ゆらゆら揺れる布の上を歩くと雲の上を歩いているよう。中に潜るとドーム状の空間が心地よい。数人で布を持って全力疾走すると、大きなマントのように広がり、そのままクラスメイトを包み込んだ。宇宙の映像を投影するギャラクシーや、空中に布を浮かせるなど、中学生の元気は止まらない。

豊後大野市立新田小学校 1・2年生
豊後大野市立新田幼稚園 5歳児 (豊後大野市)

「ころころピンポン」

一人一個、オレンジ色のピンポン玉を、思いっきり高く投げる。強く床に投げて跳ねさせる。全員で一斉に投げると、ピンポン玉は宙に、床にと飛び跳ねた。カラフルなピンポン玉をシャワーのように勢いよくばらまくと、歓声が上がります。好きな色のピンポン玉を集めたり、投げたりして、色にまみれて遊んだ。

大分県立大分支援学校 高等部 1年生 (大分市)

「静かなるアクションペインティング」

10mのロール画用紙は、広げただけでワクワクする。クレヨンで丸い円を描く。腕をぐるぐる回して大きな円を描く。準備運動が終わったら、一気に好きなものを描いていった。カラーインクと水彩絵の具をまき散らすと、クレヨンの隙間に色が入り込んでいく。筆を使って色を広げて混ぜると、新しい色が生まれる。身体を大きく動かしながら描くのは楽しい。



九重町立飯田小学校 3・4年生 (九重町)

「静かなるアクションペインティング」

腕を大きく回して描いたカラフルでグルグルな形。クレヨンで描き、カラーインクを広げると、線の上はインクをはじいて浮き上がる。ボトルに入ったポスターカラーは顔料系。たっぷり紙の上にのせた後、手足を使って紙いっぱい絵の具を広げた。タオルで絵の具の水分を吸い取るとクレヨンの線が浮き上がった。



大分市立長浜小学校 特別支援学級 (大分市)

「静かなるアクションペインティング」

長さ10mの白い紙を色いっばいに埋め尽くすため、紙を広げるだけで大喜びの子どもたち。白いクレヨン、色付きクレヨン、カラーインクと画材を変えていく。何かを描くよりも、色が広がる様子を楽しむ。水彩絵の具を垂らした後は、筆だけでなく手や足で色を混ぜる。ダイナミックな画面が出来上がった。

宇佐市立南院内小学校 6年生 (宇佐市)

「カタチをみる」

利岡誠夫氏の寄贈によるOPAM「利岡コレクション」から、形をテーマに5点の作品を持って行き、作品を見るワークショップを行った。離れて全体像を見ると、何が描いてあるかすぐわかる作品もあれば、なんだかわからないものもある。近寄って描き方や支持体も見る。抽象化された画面はいろいろなモノを想像できるのが楽しい。様々な形に切り取った紙を見て、思い浮かんだ絵を描くミニ・ワークショップを行い、視ることと想像することを楽しんだ。



大分市立長浜小学校 5年生 (大分市)

「器をみる・つくる」

植物や動物など、いろいろな形・絵柄の皿をたくさん並べて見る。その中に気に入った皿はあるだろうか。いつも使いたい皿は？とおきの日に使いたい皿は？大切な人にプレゼントしたい皿は？気に入った皿といっても、その時々で違うだろう。皿の後は、美術館から持って行った小鹿田焼の器、作家がつくった世界に一つだけの器、紙の器を見て、触り、いろいろな素材や用途の器があることを確認した。最後は自分のオリジナルの器づくり。色画用紙をベースに、色鉛筆を重ねて塗ったいろいろな器が並んだ。



日田市立若宮小学校 1・2年生 (日田市)

「ふわもこギャラクシー」

布を膨らませる体感型ワークショップ「ふわもこ」は、OPAMでは開館準備室の頃から、いろいろな学校や園で行ってきた。同じ形でも、お饅頭やお餅、クラゲや卵など、子どもによって見えるイメージは異なる。そして大きな掛け声をかけ、息を合わせると、より大きく膨らむ。体育館を暗くして、宇宙の映像を投影する「ふわもこギャラクシー」を行うと、興奮は絶好調となった。





来られないなら、こちらから行く

アウトリーチ・プログラム



豊後高田市立戴星学園
小学1~4年生 (豊後高田市)
「ホワイトビレッジ」

真ん中に穴が空いている手のひらサイズの板を池に見立てて、橋をかける。細長く切ったパネルは糊がついているので、好きな長さに切って貼っていくのは簡単だ。いくつも階段がある橋や、パネルを飛び出すほど大きな橋など、いろいろな橋ができた。橋の周りに建物、遊具もつくって、みんなのパネルをつなげると、大きな街が完成した。カラーフィルムをつけた懐中電灯でライトアップすると、幻想的な街に変化した。



津久見市立堅徳小学校 1・2年生 (津久見市)
「ぼわんぼわん」

ビニール袋を振り回し、膨らませる。端を結べば、簡単な風船の出来上がりだ。はじいて高く上げてみると、いつのまにか友達同士、投げあっている。黒くて長いビニール袋を数人で持って走ると、くねくねしてまるで竜のよう。さらに大きなビニール袋に布乾燥機の熱風を入れると、ちょっと持ち上げるだけで驚くほど高く浮いた。上げたり、転がしたり、乗ったり、空気の形と戯れるのは楽しい。



大分県立大分支援学校
高等部 全学年 (大分市)
「音で遊ぶ」

身近なモノの音を楽しむワークショップ。まずは、割りばしを使って壁、床、椅子を叩く。部屋中にトントン、カンカンと音が響いた。音が聞こえるのは空気の振動があるからだ。長いホースを耳に当てると、反対から喋る声がよく聞こえる。グネグネに伸びた迷路のようなホースを使って、みんなで声を響かせ楽しんだ。

大分市立小佐井小学校
特別支援学級 全学年 (大分市)
「ふわもこ」

直径8mもの大きな布は、みんな初めて見る。やさしく揺らす、激しく揺らす。ゆらゆら、バサバサと布の表情は変化する。中に空気を入れて膨らませると、全員がすっぽり中に入れる。巨大なお餅の中に入ったみたいだ。中心に向かって周りの布を集めると、身長よりも高く膨らんだ。みんなでジャンプして布を揺らすと、全体に振動が伝わり、生き物のように動いた。



大分県立別府支援学校
小学部 1~4年生 (別府市)
「静かなるアクションペインティング」

大きな紙にたくさん色をまき散らし、長い筆で混ぜていく。それだけで楽しい。あらかじめクレヨンで描いたところは水分をはじくので、線が見える。しかし顔料系の絵の具を垂らすとクレヨンの線は見えなくなった。濃い絵の具は下の色を覆ってしまう。たくさん色を重ね混じりあった画面に、紙を重ねる。転写された色・形は対称形になった。



佐伯市立宇目緑豊小学校 3年生 (佐伯市)
「回転デコレーション」

丸くカットした発泡スチロールの板に、ビー玉をつけるとコマになる。ケーキのデコレーションをイメージしながら、カラーテープや細長くカットしたスチロール板を貼っていく。美味しそうなお菓子のコマ、キャラクターに乗ったコマ、虹色のコマなどができ、一斉に回すと色がきれいに混ざり合った。



別府市立鶴見小学校 6年生 (別府市)
「ふわもこギャラクシー」

直径8mの布を膨らませる。呼吸を合わせると空中に浮かせることも可能だ。しかしちょっとでも合わない、すぐに傾き、ひっくり返ってしまう。きれいなクラゲのような形ができるまで、大きな掛け声をかけ合いながら集中する。ふんわり浮かんだときには喜びの声が上がった。宇宙の映像を投影すると、幻想的な風景が広がった。

国東市立武蔵中学校 3年生 (国東市)
「空想建築」

こんな家があったら面白い？ 空想建築から実際に存在する家まで、世界中の建築を紹介した。その後、みんなで自分の住みたい夢の家をつくる。材料は紙やペットボトルのキャップ、モールなど、いろいろな素材からできたOPAM特製建築キット。完成した家には表札もつけて、できた家を並べ、道でつなげて街にした。



豊後大野市立朝地小学校 3・4年生 (豊後大野市)
「静かなるアクションペインティング」

大きな紙に寝転がって、友達同士、身体のカタチをクレヨンでなぞる。紙の上は、手、足、頭など、みんなの身体で埋め尽くされた。その後、水、カラーインク、ポスターカラーを垂らし、色を混ぜながら広げる。水と絵の具たっぷりの画面から、タオルで水を吸い取ると、最初に描いた自分の身体があらわれた。



国東市立武蔵中学校 1・2年生 (国東市)
「超・ぼわんぼわん」

一辺13mの巨大な特製ビニール袋に、大型送風機で空気を入れて膨らませるワークショップ「超・ぼわんぼわん」。少しずつ空気を入れながら膨らませていく途中で、その上を歩いてみる。歩くたびに変わる膨らみの形が面白い。下に潜ると、身体にビニール袋がまとわりつく。さらに空気を入れ、パンパンに膨らませて巨大な風船をつくる。見たことないほど大きな空気のかたまりをみんなで持ち上げ、サッと退くと、ぼわんぼわんと床を弾んだ。



アウトリーチ・プログラム



日田市立石井小学校 4年生 (日田市)

「たまごカプセル」

10歳の「二分の一成人式」を迎える子どもたちにとって記念になるような、タイムカプセルならぬ、たまごカプセルをつくった。未来の自分への絵手紙を描き、中身を抜いた卵の殻に入れ、カラフルな色紙を貼って手紙を閉じ込める。未来の自分を想像してのデコレーションは、ワクワクする。何年後、カプセルを開ける日が楽しみだ。



佐伯市立鶴岡小学校 1年生 (佐伯市)

「リング・リング・リング」

直径15cmの輪を、転がす。滑らせても、コマのように回しても楽しい。たくさん使えば、楽しさは無限だ。小さい輪はつなげることができる。たくさんつなげれば、鎖のようになる。これも滑らせたり、回したり、縄跳びのようにすることだってできる。もっと大きな輪は、組み立ててフラフープをつくる。不定形にも自由自在に組み立てられる。ホースを組み合わせると、形はさらに複雑になった。



大分県立由布支庁学校
高等部 1年生 (由布市)

「ぱたふわ+ぼわんぼわん」

身体を動かすことは気持ちいい。紙をうちわでふわふわ浮かせる「ぱたふわ」は、細長く紙を切ると竜のように舞い上がる。ビニール袋に空気を入れる「ぼわんぼわん」は、温風を入れると軽々と高く舞い上がる。どちらもその場の様子が一変する体感型ワークショップだ。



大分県立大分支庁学校
小学部 2・3年生 (大分市)

「ころころピンポン」

両手いっぱいのピンポン玉をぶちまける。無数のピンポン玉は、あっちへ跳ね、こっちに転がる。トレーを使えば、好きな色をゆっくり選べる。空中に投げてから落ちるまで、わずか数秒。やめられない楽しさがある。



津久見市立津久見小学校 1年生 (津久見市)

空飛ぶのりもの

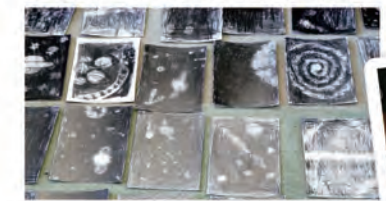
色画用紙を切ったり貼ったり丸めたりするワークショップ。お題は「空飛ぶのりもの」だ。速く飛ぶために飛行機の形は細くする。ふわふわゆっくり飛ぶ気球はまん丸だ。魔法の絨毯はフサフサをつけ、カラフルにする。思い思いの楽しいのりものができた。子どもたちの夢をのせて、世界の果てまで飛んで行けー!



宇佐市立天津小学校 3~5年生 (宇佐市)

鉛筆って、すごい!

小川信治「ダミアンのロンド」(『楽しい美術館』p.39-40)を視るワークショップ。初めにスライドで小川氏の作品を紹介する。名画から何かが欠けている作品は枚数を重ねることに想像が膨らみ、人物や建物が壊れる作品は写真のような鉛筆表現に驚き、鏡のような対称の風景の作品から間違い(非対称部分)探しを楽しんだ。そして「ダミアンのロンド」を視る。右から左から、方向を変えながら鉛筆で描いた部分を探し、リトグラフの試し刷りもあわせて見た。その後は制作タイム。4Bと4Hの鉛筆を使って画面を真黒くする。練り消しゴムを真っ黒い画面に押し当てると白くなる。宇宙を描くと、無限の空間が広がるようだった。



ジオ・ジュニアリーダークラブ(豊後大野市) 自分の色をつくろう

昨年度に引き続き、豊後大野市教育委員会社会教育課が主催するジオ・ジュニアリーダークラブで、石を砕いて顔料をつくるワークショップを行った。石は奥島川の河原で採集した色とりどりの凝結溶解岩やチャート。砕いて乳鉢ですり、紗膜に通すと、パウダー状の顔料が出来上がった。そこに卵を混ぜて、テンペラ絵の具にする。さらに今回は蜜蝋を混ぜてクレヨンにも挑戦。蜜蝋ワックスが柔らかくて、少しベタベタ感が強く、固まりづかった。

ジオ・ジュニアリーダークラブのメンバーは、小学5年生から中学1年生まで。彼らはOPAMが開館した時に、小学生ファーストミュージアム体験事業で来館している。中にはアトリエ・ミュージアムで、鉛筆で真っ黒にした画面に、消しゴムを使って描くワークショップに参加したことを覚えている子どももいた。こうした再会は美術館ならではの思い出だ。



※アウトリーチプログラム: 文すべて横本寿紀



来られないなら、こちらから行く

出前ワークショップで 出会った子どもたち

大分県美術館では、美術館のスタッフが館外へ出かけて行き、子どもや先生たちとワークショップをするアウトリーチ活動を行っている。場所は、美術館の中のアトリエや展示室ではなく、学校の教室や体育館などだ。アウトリーチは、私たちが勝手に押しかけていくのではない。私たちがどんなに出かけて行きたいと思っても、呼んでもらえなければ行くことはできない。

2018年からは、より一層県内各地に広く展開しようと、「出前ワークショップ」と名づけたアウトリーチ活動を始めた。大分県で「第33回国民文化祭・おおいた2018」「第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会」が開催されるのに合わせて、教育普及が普段ワークショップを行っているアトリエで、活動記録展示をすることになった。期間は2か月間。美術館でのワークショップをそんなに長い期間行わないことは、5年間で初めてだった。たくさんの人が大分を訪れる機会に、これまでの活動を紹介したい、という思いはもちろんだが、もう一つねらいがあった。それが出前ワークショップ。美術館内でのワークショップを減らした分、美術館の外へたくさん出かけることだ。美術館で出会える子どもたちもいるが、大分県はまだまだ広い。出会っていない子、美術館へ来たことがない子、美術館のことを知らない子がたくさんいる。それならば、待っているだけではもどかしいので、いっそのことこちらから出かけて行こう!ということになったのだ。

私が美術館へやって来たときには、すでにこのプログラムは決まっていた。2か月間でどんなところへ行けるのだろうか、どんな子どもたちと出会えるのだろうか、と楽しみにしながら、準備に加わる。はじめにも言ったが、出前ワークショップは、私たちが勝手に押しかけていくわけではない。呼んでもらえて初めて行くことができる。募集を始めて、どれくらの数の学校に応募してもらえるだろうか、と待っていた。予定していた募集数を上回る応募が届いたときには、とてもうれしかった。応募してくれた向こう側には、先生たちがいる。忙しい中で、情報を受け取り、応募用紙に記入し、授業の時間を確保して、応募してくれた。そんな先生

からは、楽しい体験をしてもらいたい、知らないことを知ってほしい、出会いの機会を増やしたい、という子どもたちへの愛が感じられる。

2018年度の出前ワークショップは、2か月間で25校の幼稚園、小学校、高校へ行って終了した。さて次は?と、2年目のことを考える。来年、国民文化祭、全国障害者芸術・文化祭は開催されない。では、来年は実施する?しない?するとしたらどうやって?

結論が出るのは早かった。もちろん、来年も実施する。それは、私たちがとても楽しかったから。そして、いつも出会えない子どもたちに出会えた喜びが大きかったからだ。2019年度は10月から3月までの実施期間を設け、募集をした。今回も予定していた募集数よりも多くの申し込みがあり、24校の幼稚園、小学

校、中学校、支援学校へ行き、29回ワークショップを行った。出前ワークショップは、県内どこへでも行く。美術館から遠いところはもちろん、近いところにも。

私は子どものとき、美術館から遠い場所に住んでいたの、美術館になじみがなかった。自分の体験から、美術館から遠いところに住んでいる

子どもたちが美術館へ来ることが難しい、ということは感じていた。一方で、美術館の近くに住んでいる子どもたちはいつでも行けてうらやましいな、と思っていた。しかし、実際はそうではなかった。子どもたちが自分で勝手に、自由に移動できる範囲は限られているし、美術館の存在を知らなければ、行こうとも思わない。「子どもたち」と一言でいっても、いろいろな場所、さまざまな環境で生まれ育っていて、みんな全く違う。「美術館へ行く機会の少ない子どもたち」というように、ひとつの言葉でまとめることはできない。交通アクセスが悪いのかもしれないし、単純に興味が無いのかもしれない。他の理由だってたくさんある。そんないろんなものを飛び越えて子どもたちに出会えるのが、学校へ私たちが行くことができる「出前ワークショップ」だ。そう思うと、本当に貴重で、大切にしたい時間である。

出前ワークショップで出かけて行くと、子どもたちが待ってくれている。1~2時間の間でその子どもたちのことを知り尽くすことはできないけれど、はじめましての出会いだ。

「大分県立美術館を知っている人?行ったことある人?」と尋ねると、思っていたよりもたくさん手が上がった。そういえば、そういえば嬉しそうな顔になる。しかし、住んでいる場所が美術館から遠いと、上がる手が少なくなるのも現状だ。

私は、美術館になかなか行くことができなかったの、住んでいる場所によって経験できる

ことが変わるなんて不公平だ!と思っていた。でも、今になって気づいたが、美術館から遠い場所に住んでいても、身近に楽しい発見はたくさん隠れているし、その場所だからこそ体験できることがいっぱいある。出前ワークショップで九重の小学校へ行ったとき、体育館の入り口にスキー靴がずらりと並んでいた。先生に尋ねると、子どもたち一人ひとりが自分のスキー道具を持っていて、シーズンになるとみんな滑りに行く

らしい。他にも、車を運転して各地の学校へ行く途中、緑がきれいだったり、紅葉がきれいだったり、つい見とれてしまうほど美しい景色に出会うことがある。どこのまちにも、「そこにはないもの」があって、同時に、「そこにしかないもの」がある。住んでいる場所によって経験できることが変わる不公平さは、マイナスのことではなく、プラスのことなのではないか。

今になって振り返れば、私の育った場所もいいところがいっぱいあって、体験できることはたくさんあった。でも、当たり前にある環境は、当たり前にか感じていなくて、自分が住んでいる場所を遊び尽くせていなかった。大分県立美術館の教育普及に来て、大分県の石から絵の具をつくる顔料制作をやりながら、「子どもの時、あんなに畑に行くと土を触ったのに、そんなふうに見てなかったな」と思い返した。他にも、おじいちゃんから刃物の研ぎ方習ってけばよかったな、とか、山に生えてる竹でもっといろいろつくってみてよかったです。とか、子ども時代に、機会があったのにやり損ねていたことがたくさんあったことに気づき、もったいないことをした、と今更ながら後悔している。

出前ワークショップで出会った子どもたちは、みんなとても元気で、その場所その時間を思いっきり楽しんでいる様子だ。今のうちに、今ある環境を存分に遊びつくしてほしい。その経験はきっと、近い将来か遠い将来か、どこか思わぬところで生かされる。

美術館や美術とも、もちろん出会ってほしいので、これからもアウトリーチ活動は続けていきたい。知らないこと・ものに出会っていくのはとても楽しいこと

だ。美術との出会いが、日常の生活をまた違ったものに変えてくれることもある。こんな場所、こんなものがあるよ、と美術のおもしろさを伝えていきたい。美術と一言でいっても、幅広い。出前ワークショップで会う美術は、その中のほんの一部だ。だからこそ、もっとたくさんの美術と出会いに、いつかまた美術館へ来てほしい。



藤木 美里 Misato Fujiki
大分県立美術館 学芸企画課 教育普及 学芸員
からあげ片手に、大分県内いろんなところ気まぐれ一人旅してみたい。
みんなのおすすめスポット教えて下さい。

いっしょに、やりましょ

先生のための講座



美術には答えがない。教える・教えられるという関係でなく、子どもたちと一緒に感じ、一緒につくり上げていくことが可能だ。先生自身が能動的に作品を見て、心が躍れば、子どもたちに楽しさは伝わる。そのためには先生自らが楽しむことが大切だ。そんな思いをもって、先生のための講座を開催している。講座の内容は、技術的なことよりも体感的なことに重きを置いている。造形的なことは図画工作の教科書を読めば、楽しくやってみようかなという気になるし、何よりも美術という概念自体、幅が広いからだ。この研修に参加した先生たちから、「びじゅつかんの旅・旅したく」をはじめ、アウトリーチに結びつくことが多くなった。

先生のためのワークショップ

幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校教員

主体的・対話的で
深い学びってなんだ？

特別講師：鈴木陽子（東京都目黒区立五本木小学校教諭）

東京都の目黒区立五本木小学校で図画工作を専科として担当している鈴木陽子氏を招聘。鈴木氏が出会った子どもとの、アートを通じた自己表現と、コミュニケーションについてのスライドレクチャーから始まった。その後、各自が持参した土をふるいにかけて瓶に入れる。これに糊を混ぜれば絵の具の出来上がりだ。鈴木氏は、「土は大地の贈り物。色の美しさ、感触を味わいながら、思いのままに表し、“わたし”のやりたいことを見つけていきましょう」と言う。みんな思い思いに土の絵の具を使って絵を描いた（使用した紙は鳥ノ子紙とサーペーパーというタイで漉かれた紙）。鈴木氏の講座は午前中のみで、午後は午前中に描いた作品を見た後、図画工作、美術、ワークショップについて、先生方からの感想・意見を交えたミニ・シンポジウムを行った。最後はコレクション展へギャラリーツアーに行き、作品を見ることを楽しむ。一日ワークショップで体験したことを、ぜひ子どもたちと実践し、一緒に美術館へ来てほしい。(文)



玖珠郡教育研究協議会図工・美術部会

子どもの絵の見方・
かんたん楽しい工作の授業

前半は段ボールを使ったワークショップ「ダブル サイド ペイント」を行う。はじめに段ボールを好きな形に切り取り、他の人と交換する。シルエットからイメージを膨らませ、絵を描く。再び誰かと交換し、裏返して絵を描く。発表会では、両面異なる絵を1枚ずつめくることに歓声があがった。この楽しさを子どもたちにぜひ伝えてほしい。後半は、美術館で作品を見ることについてレクチャーを行った。(文)



いっしょに、やりましょう
先生のための講座

杵築市教育研究協議会図工・美術部会

子どもの絵の見方・
かんたん楽しい工作の授業

「子どもの絵の見方」と題しての講義と、「かんたん楽しい工作の授業」をテーマにした工作のワークショップを実施。通常は四角い画用紙に絵を描くことが多いが、今回は自由に切った段ボールの形から、連想して絵を描く、発想の手掛かりを形に求めた制作を体験。作品の完成度ではなく、だれも思いつかないような、仲間のユニークなアイデアに驚き、みんなで楽しむ、そんな評価の視点を先生に持ってほしい。(さ)



日出町教育研究協議会図工・美術部会

子どもの絵の見方・
かんたん楽しい工作の授業

「2学期に工作の授業をしたい」という声を受けて、「かんたん楽しい工作の授業」をテーマに、段ボールを組み上げるワークショップを実施。参加した先生は、段ボールを自由に切り出し、積み上げていくうちに、船や塔、風景などつくりたいものが見えてくる、という体験をした。素材と触れ合う中で、導かれるようにイメージが膨らんでくる、そんな体験が子どもの思考力、表現力を高めてくれる。(さ)



中津市立幼稚園会

身体を使ったワークショップ～
ふわもこ

公立幼稚園の先生方を対象に、身体全体を使って空気や素材を体感するワークショップを実施。最初にふわもこ。身体全体を使っての体験に、会場は歓声に包まれた。その後は紙コップを使った造形遊び。フロアいっぱいに並べたり、高く積み上げたりした。中には、並べたコップの上に乗ってみたり、人の周囲に積み上げて取り囲んだりするグループなど、それぞれが思い思いの遊び方を見つけながら、活動を楽しんだ。(さ)



竹田市教育研究協議会図工・美術部会

子どもの絵の見方・
水彩画の指導基礎講座

子どもの絵の評価の視点と、水彩道具の基本的な使い方の指導について確認。「絵の具で塗るのが苦手」という子どもをつくらないようにするためには、子どもが「楽しい」と思えるように絵の具と出合わせ、年齢に応じた水彩絵の具の使い方を、きちんと習得させることが大切。受講者は、水彩絵の具の中から好きな色を使い、自由に線や点を描くことで、水彩絵の具の表現力や美しさ、楽しさを体験した。(さ)



宇佐市教育研究協議会図工・美術部会

子どもの絵の見方・
水彩画の指導基礎講座

液体粘土と絵の具を混ぜて「とろとろ絵の具」を共同で作り、手などを使って自由に描く体験活動をした。入学時から一人一人に水彩道具を持たせ、パレットで絵の具を混色させる指導を行っている小学校もあるが、子どもにとって、色や道具との出会いはとても大切。色を自由に使って遊ぶことや、絵の具を使うことの楽しさを先生方にも体験してもらい、子どもの年齢や、興味関心に適した道具や技法を使うことの大切さを感じていただいた。(さ)



別府大学短期大学部 専攻科 初等教育専攻学生

身体を使ったワークショップ～
表現活動

将来、先生を目指している大学生を対象に、美術の楽しさを体感するワークショップを行った。広がる・膨らむ布が楽しい「ふわもこ」、成功すれば巻状に紙が巻き上がる「ばたふわトルネード」、軽々と持ち上がる「ぼわんぼわん」、500個のピンポン玉と戯れる「ころころピンポン」と、身体と感覚を思いきり刺激した。笑顔で、真剣にからだを動かす元気のいい学生たち。情熱あふれる先生になってほしい。(え)



いっしょに、やりましょう
先生のための講座

幼稚園新規採用教員研修

一緒にみる・身体で感じる

「展示室で作品を視る」「美術体験」の2グループに分かれて、美術館を体感する。展示室では子どもと同じ目線で視ることを意識する。作品によっては照明の反射で見えない作品も少なくない。美術体験では、2人で、3人で、6人で、棒を指で支える「コミュニケーション・スティック」、障子紙をちぎってうちわであおぐ「ばたふわ・トルネード」、大きいビニール風船「ぼわんぼわん」を行った。(え)



幼稚園中堅教諭等資質向上研修

みる・つくる・あそぶ・かざる

在職8年目から11年目の先生たちの研修。自らが楽しむと同時に、子どもたちを美術館に連れて来ることをイメージしてほしい。体感ワークショップでは「コミュニケーション・スティック」、そして「ふわもこ」を行う。コレクション展示室では一つの作品をじっくり視る。初めは気づけなかったことも、丁寧に時間をかけ、みんなで視ると発見も多い。参加した先生たちはみんな積極的に楽しんだが、その楽しさは子どもたちに伝わるだろう。今度は子どもたちと一緒に来てほしい。(え)



ステップアップ研修

色と素材～遊びから表現まで～

在職2年目の公立小学校教諭を対象とした研修。普段、美術館ではどんなワークショップを行っているのか、実際に体感することでその楽しさや重要性を感じてほしいのと同時に、なるべくいろいろなものを紹介したい。「コミュニケーション・スティック」、ホースによる音の伝わり方を遊ぶ「ホースの音」、布を膨らませる「ふわもこ」、500個の「ころころピンポン」、そしてワークショップのヒントとなる材料や、今まで学校との連携で共同制作した野菜・果物を使ったインスタレーションデザインを紹介する。展示室では先生自身が視ることを楽しんだ。(え)



幼保連携型認定こども園新規採用保育教諭研修

一緒にみる・身体で感じる

毎年、新しい先生が採用される。この春、こども園に採用されたばかりの先生の研修は、昨年度と内容を少し変えてみた。園に帰ってから、園長先生や昨年参加した先生たちと話すことで、いろいろな人に美術の広さを知ってもらいたいからだ。人数が多いので2グループに分かれての実施だが、体感ワークショップでは「ふわもこ」を行ったほか、石・紙コップ・プラスチックカップをひたすら積み上げる。コレクション展示室では、子どもと同じ視線で視ることを意識し、離れて視る・近寄って視ることを繰り返すギャラリートークを行った。(え)



テーマ別研修

ドローイング/見える・消える

大分県教育委員会主催による小学校の先生のための研修。カラーインクを使ってダイナミックな画面を描く、発想とその展開のドローイング・ワークショップを行った。コレクション展示室でも、1点を近寄って視る・離れて視ることを繰り返す。作家の描き方が全体の印象にどう影響を及ぼすか、そのテクニックに迫った。(え)



幼保連携型認定こども園中堅保育教諭等資質向上研修

マテリアルバイキング ～みる・さわる・つくる～

丸一日あるワークショップでは、様々なものを紹介できる。「コミュニケーション・スティック」、5mのホースを両耳に当ててそのホースを叩いたり、糸電話のように会話する「ホースの音」、ひたすら鈴を転がす「スズナリ」、布を膨らませて宇宙の映像を投影する「ふわもこギャラクシー」、バランスを考えて積む「積み竹・積み石・積み木っ端」、1,000個の「ころころピンポン」、石は砕けば絵の具・磨けば宝石の「宝石ピカピカ」、アルミホイルからつくる「ぴかりん」、土の絵の具や泥団子、アトリエ・ミュージアムでつくった工作と材料など、次から次へと登場した。そして教材ボックスと1階アトリウムやコレクション展示室、情報コーナーのミニギャラリーを見て回った。(え)



※先生のための講座:文(え) 榎本寿紀、(さ) 佐藤収

大分県の 図工・美術教育について

これでいいんだ!

絵は画用紙がなくても描ける。
 でこぼこの板や段ボール、壁、地面、石にも描いてみよう。
 絵は筆を使わなくても描ける。手や足で直接描いたり、
 棒に絵の具をつけて描いたりしてみよう。
 絵は絵の具がなくても描ける。土や粘土を伸ばしたり、
 紙や毛糸などを張り付けたり、削ったりして描いてみよう。
 落ち葉をかき集めて地面に模様を描くのも楽しそうだね。
 そもそも絵の具をつくることからやってみようか?
 絵の具ってどうやってつくるの?

様々な素材に触れることは、楽しいことであり、そのような体験をした時の子どもの笑顔や、驚く顔を見ることは、先生方にとっても大きな喜びである。

しかし現実には学校は時間との闘い。小学校では、1週間に30単位時間ほどある授業の中で、図工の時間は2時間ほど。中学校では、美術の時間は週にほんの1時間ほどである。45~50分間の授業で、始めの説明と準備をして実際の作業時間は30分程度。活動が終わったらすぐに片づけをして、次の教科の授業の準備。先生も子どもも頭の切り替えが大変。1週間たったら「何をどこまでやっていたっけ?」と、また、一から始める感じ。こうなると、準備に手間のかかる題材や、保管に場所を取る題材、材料費のかかる題材はなかなかできず、絵画的な授業が多くなりがちなのもしかたがない。

大分県には小規模校が多い。そのため小学校では図工専科の先生がいない学校が多い。また、中学校では、美術の免許を持つ先生がいない学校もあり、そのような学校では他の教科の先生が美術を指導しているという実情もある。限られた時間や環境の中で、「子どもたちに楽しい授業を」と頑張ってくれている先生がたくさんいるのだ。もちろん図工・美術の専科の先生もみな、限られた条件の中で、子どもに豊かな美術体験をさせるべく日々奮闘してくれている。

今年度、学校を訪問したり、教員研修を開催したりする中で、子どもが夢中になるような楽しい授業づくりに一生懸命取り組んでいる多くの先生方と出会うことができた。子どもと関わることを喜びとし、子どもの変容を目指して日々がんばっている先生方を見ると、元気つけられる。こんな先生と一緒に毎日勉強している子どもたちはしあわせだと思ふ。

先生一人一人の得意技を生かして、子どもから「これでいいんだ」「こんなことをやってもいいんだ」という言葉が出るような楽しい図工・美術の授業づくりをぜひ推進してほしい。

学習指導要領で、博物館・美術館の活用が謳われている。美術館としても、学校と連携して、多様な美術体験をし、美術を楽しんでいる子どもを増やすお手伝いができることはないかと常に考えている。



佐藤 取

Osamu Sato

大分県立美術館 学芸企画課 主幹(学校連携担当)

4月に突然、美術館勤務という未経験の職場に変わって、毎日四苦八苦しながら学校と美術館をつなぐ役割をしている。70年代の洋楽をギターで弾くことが好き。子どもの頃に好きになったものはいくつになっても変わらないものだなと、思うこの頃。



塗り残しがあってもいいんだ!

県立美術館のコレクション展で水墨画を前にした小学生がつぶやいた言葉。

水墨画では、下地そのものの色を生かして、水・空・道・地面・雪などを表現することがある。何も描いていないのに、墨で描いた部分との対比により、そこには道や川が広がり、霧が立ち込めたように見え、画面がはるか奥まで広がっていく。

この子は、学校の図工の授業では、画用紙の画面の隅々まですき間なく絵の具で彩色するよう習ってきたのだろうか、「塗り残しがあっても未完成」と思っていたようだ。もちろん、先生も全ての課題においてそのように指導しているわけではないことは承知している。

絵画に限らず、音楽、映像作品、大衆演芸など、およそ芸能に関わる分野では「一定のスペースや時間の中にいかに多くの情報を詰め込めるか」という、作品の密度が評価されることも多い。

多くの子どもに一齐に作品を制作させ、完成させることを目指している先生にとって、より良い作品をつくらせることは責務であるし、良い作品をつくれることは子どもにとっても達成感につながる。子どもに対してゴールを明確に示し、「ひとつの作品を根気強く完成させる」、「ものづくりの大切さを学ばせる」という意図もあって、先生は余白を残さないよう指導してきたのだろう。

教員研修での事前アンケートでも、「子どもに最後まで根気強く作品を仕上げさせるための声掛けに悩んでいる」という声が多いことから、それがわかる。

まずは画面を絵の具で全て彩色することを体験させ、発達段階に応じて、「間」の意味や「引き算の美しさ」については別の機会に、という考えかもしれない。しかし、子どもは一度習ったこと、身に付けた価値観や、きまりをずっと覚えていることもある。「クレヨンが幼児が使う画材」「油絵具は水彩よりも難しい画材」という思い込みを時々聞くのも、学校での経験が基になっているのかもしれない。

私たちは、些細なことをきっかけとして、一定の価値観や思い込みにとらわれていることに、気がつく瞬間がある。美術館で美術作品に触れたり、美術体験をすることが、そのきっかけになれば良いと考えている。子どもの自由なつぶやきがたくさん見られる美術館でありたいと思う。そのつぶやきを、先生にもしっかりと受け止めてほしい。そんな場面がたくさん見られる機会を提供したい。子どもも先生も目からうろこ、そんな美術体験ができる美術館でありたいと思う。

ゴッホ紙って何ですか?

全国の美術教育に携わってきた方とお話をすると、大分県との違いに驚かされることが多い。いや、逆に驚かれることのほうが多いかもしれない。

県外の図工専科の先生とお話をさせていただいた時のこと。大分県ではおなじみの「ゴッホ紙」を見たことも聞いたこともないというのである。ネットで検索してみたが、確かに商品としてはなかなか出てこない。全国で流通しているものではなさそうだと、ということに驚愕!いえ、本当は私も「そうなんじゃないかなー」と、うすうす感じてはいたのだが。

「ゴッホ紙」は四つ切りサイズの厚手の画用紙で、片面は白、もう片面は薄緑がかかったグレーっぽい色。大分県内で行われている作品展覧会に出品する際は、この紙を使うことが指定されているため、幼稚園から高校生まで、県内のほとんどの子どもはこの紙に絵を描いた経験はあるはず。つまり、毎年この紙に向かうことが大分県の多くの園・学校の図工・美術の教育課程に組み込まれているのだ。幼稚園や小学校低学年の子どもにとって、この紙のサイズは大きく、なかなかの作業でもある。

大分県では、長年図工・美術の先生方が団結して、子どもたちに楽しい授業、豊かな表現力をつけさせようと、様々な手立てを計画し、県内に広めようと取り組んできており、それは今でも続いている。県内大多数の学校が参加する展覧会、統一した画用紙の指定、独自の研修会の開催などがその例である。これらの取り組みは、前述の通りそのまま教育課程にも反映されている。その成果があって、各学校の子どもの絵画的表現に関する表現力の向上は目を見張るものがある。

「次の図工の授業では子どもたちとどんな美術体験をしようか」と考えることは、とても楽しい作業である。その一方で、図工の専科、美術の免許を持った先生がいない学校の、図工・美術担当の先生にとっては、時に苦しみでもある。このような時に、ある程度課題が決められていることで、先生にとって大きな助けとなっているという実情もある。

流れに沿っていくことは大切だが、図工・美術に携わる先生には、目の前の子どもや地域の実情に合わせて、思う存分アイデアを生かした楽しい授業をしてほしいと願う。

美術館で行っている教職員研修や、ワークショップ、コレクション展観覧事業が、先生や子どもの見方を広げるために役立つものでありたいと思う。美術館の教育普及の事業を学校教育に生かせるツールのひとつとして、したたかに活用していただき、先生一人一人のアイデアを生かした授業を実践していただきたい。

美術館のガイドスタッフ

子どもが作品と向き合う時間の保障を

学校の図画工作や美術の時間でも、美術作品の鑑賞を行っている。その中で、指導者が準備をすればするほど、大人の出番が多くなってしまい、子どもが考えたり感じたりする時間や出番を奪っている、というジレンマに陥る場面を多く見てきた。「子どもの考えを引き出そう」とがんばればがんばるほど、指導者がしゃべってしまう。こうなると、鑑賞の時間は子どもにとって「作品を見る」時間ではなく「お話を聞く」時間になってしまうのだ。説明をしながら、または指示を出しながら作品を見せては、聞くことに神経が行ってしまったり、考えてしまったりして、「作品から感じ取る」ことはできにくい。せっかくの美術作品を目の前にして、これではもったいない。

美術館の作品を見て、何が心の琴線に触れるか、何を自分自身のものとして吸収するかは、子どもにゆだねることが大切だと考えている。こちらが求める答えを子どもに言わせるための、誘導するような問いかけは、対話ではない。美術の分野では、一人一人の子どもの感じ方を尊重する。子どもに教えたり、指示を出したりするのはではなく、一緒に見る。そんな美術体験をさせても良いのではないかな。

子どもの感じ方を重視するためには、作品との出会いの瞬間と、出会ったあとの作品と向き合わせる時間が大切だろう。その上で、作品の特性や子どもの特性に応じて、見方を教え、視点を与える。まずはそんな手順での鑑賞が良いのではないかと考える。図画工作や美術の時間は、もう少し自由でもいいのではないかな。



あの方々は美術館の人ですか？

子どもたちを引率して、美術館内を案内する「ガイドスタッフ」の姿を見て、学校の引率の先生からよく聞かれる。子どもたちを案内し、作品の前で、子どもに寄り添い、子どもの言葉を導き出すその姿勢やスキルに感心しての言葉だ。

「この事業のためにお手伝いしてくださっている、ガイドスタッフの皆さんです。常にこの業務があるわけではありませんが、この方々がいてくれないと、この美術館の鑑賞体験はなり立ちません」と答えている。

大分県立美術館では、子どもたちの「鑑賞指導員」として、「ガイドスタッフ」の方々が登録されており、「びじゅつかんの旅」や「地域美術館体験事業」「ミュージアムを活用した美術教育実践事業」等において子どもたちの鑑賞指導をしてきている。



始まりは「小学生ファーストミュージアム体験事業」

「大分県立美術館開館時に、県内の全小学生6万人を美術館に招待する」という知事の強い意向で始まった、前代未聞の規模の「小学生ファーストミュージアム体験事業」。毎日千人規模の小学生が美術館にバスでやってくる。この子どもたちを、グループごとに館内をガイドしながら案内をするスタッフを、臨時に採用した。このときは、観客でひしめき合う展示室内を、作品に触れせず作品解説をしながらスムーズに誘導することが、ガイドスタッフの主な役割だった。

2年目から、後継事業として「アクティブ・ラーニング美術教育推進事業（今年度からは「ミュージアムを活用した美術教育実践事業」）」が県教育委員会義務教育課の事業として始まった。これは、県内の小学4年生を対象に、年間30学級程の児童をバスで美術館に招待し、主体的対話的な美術鑑賞のモデルとして実施することで、学校での鑑賞の授業の充実を目指すものである。

この時に美術館のガイドスタッフとして、4〜6名の子どもたちの鑑賞をファシリテートする役割を担ったのが現在のガイドスタッフの始まりである。同じく開館の年に、美術館の事業として「地域美術館体験講座（巡回展）」や「びじゅつかんの旅」が始まり、そこでも子どもたちをグループごとにガイドをする意味で、ガイドスタッフをつけることとなった。開館当時から務めてくださっている方に加えて、年ごとに参加して下さるようになった方が加わり、現在約30名のガイドスタッフの方が登録されており、コレクション展等の美術鑑賞業務等において活躍してくださっている。

ガイドスタッフの役割は、美術作品の解説ではなく、子どもと一緒に作品を見て、子どもの自由な感想を引き出すことである。美術作品に対する知識も必要だが「一方的に作品解説をし、子どもは聞く」という鑑賞は求められていない。それよりも重視するのが、子どもとのふれあいである。

学校での図工や美術の授業における鑑賞とは手法や目的が少し違うかもしれないが、子どもと一緒に見る姿勢や、様々な見方を提示して、子どもの多様な意見を引き出すスキルなどは、参加した学校の先生方にも参考にしていただきたい、という意図で行っている。

ガイドスタッフ研修

ガイドスタッフのスキルアップを目的として、美術館では研修を行っている。

- コレクション展の展示替えの際、事前に作品を見てもらう自主研修。
- 年に数回学芸員の解説を聞きながら、展示の見所や鑑賞のポイントを学ぶ研修。

- 地域美術展の際は、参加するガイドスタッフは、現地会場に行き、展示作品と会場を事前に確認し、担当学芸員によるレクチャーを受ける。

これらの美術館主催の研修とは別に、ガイドスタッフの皆さんは、互いに情報交換をしながら、自主的にスキルアップに努めてくださっている。

ガイドスタッフの方々の素顔

業務がない日も、美術館の展示室内で、ガイドスタッフの方とよくお会いする。展示替えがあるたびに美術館を訪ねたり、美術館の様々なイベントにも参加したりと、勉強熱心な方もしくは日頃から美術館で過ごすことが好きな方が多いのだ。学校の先生だった方や、長年勤めた仕事を退職されて、美術や子どもと触れ合える仕事をやってみようと思った方、純粋に何かお手伝いをしてみようという思いで参加して下さっている方、美術が好きで「ちょっとお手伝いをしてみようか」という気持ちで参加された方など、ガイドスタッフの皆さんの経歴や動機は様々。年齢も幅広い。業務の合間に一人一人の方とお話をさせていただくと、様々な経験や考え方をお持ちで、話題も豊富で楽しく、学ぶことが多い。

皆さんに共通するのは、向上心と学び続ける姿勢。常に明るく、前向きで、子どもと触れ合うことを楽しみにしていること。「子どもたちと過ごす元気がもらえる」「子どもとの新たな出会いは本当に楽しい」など、「美術館での出会いを楽しむ」この姿勢は見習いたいと思う。

美術館の施設や作品と共に、美術館のスタッフの方々との出会いも体験していただけるとうれしい。

(佐藤 収)





大分県内アウトリーチ&フィールドワーク実施地図

山へ、川へ、海岸へ、離島へと、県内いたるところへ出かけて教材ボックス制作のためのフィールドワークを行い、幼稚園、こども園、小・中・高等学校、特別支援学校でのアウトリーチ・プログラムを実施した。活動は現在進行中、そして今後も継続予定。各地でご協力いただいた皆様、ありがとうございました。



アウトリーチに出かけたところ

- 2015年度 ●
- 2016年度 ●
- 2017年度 ●
- 2018年度 ●
- 2019年度 ●

教材ボックスのための
フィールドワークに出かけたところ

- 2015-2019年度 ■



びじゅつって、すげえ! 2019-2020 II 「学校と、いっしょ」

企画・制作・発行
アートフル大分プロジェクト実行委員会

事務局
公益財団法人 大分県芸術文化スポーツ振興財団・大分県立美術館
大分市寿町2番1号 TEL097-533-4502

- 執筆
- 菅野剛宏 大分県立美術館 学芸企画課 課長
 - 榎本寿紀 大分県立美術館 学芸企画課 教育普及 主幹学芸員
 - 佐藤収 大分県立美術館 学芸企画課 主幹 (学校連携担当)
 - 池田隆代 大分県立美術館 学芸企画課 主幹学芸員
 - 宗像晋作 大分県立美術館 学芸企画課 主任学芸員
 - 木藤野絵 大分県立美術館 学芸企画課 学芸員
 - 梶原麻奈未 大分県立美術館 学芸企画課 学芸員
 - 藤木美里 大分県立美術館 学芸企画課 教育普及 学芸員

編集協力:ラルゴ 井上裕子
デザイン:ディ・エア 佐々木ツヨシ
印刷:株式会社 明文堂印刷
2020年3月発行
※本誌に掲載した記事・写真・イラスト等の無断転載は禁じます。

文化庁 | 平成31年度文化庁
地域の博物館を中核としたクラスター形成事業

アートフル大分プロジェクト実行委員会は、大分県芸術文化スポーツ振興財団(大分県立美術館)、大分大学、大分県立芸術文化短期大学、大分県、大分県教育委員会で構成された実行委員会組織です。国の助成を受け、地域や学校と連携しながら「美術による人材育成」を目的とした活動を行っています。

大分県立美術館教育普及グループ

大分県立美術館教育普及グループ

0505-5019

大分県立美術館

大分県立美術館教育普及グループ